

# 仮面ライダーフリード

うしとうなぎ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

大企業サンドボックスの後押しでめざましい発展を続ける実験都市、絡鳴市らくめい。贅を尽くして整備された街に、多くの若者は新たな刺激を求める。退屈に満ちた街。

しかし底知れぬ欲望を持った者たちが、その倦怠な日常を刺激的なものへと塗り替えていた。

普通の高校生、瀬良康介せらかんすけが目の当たりにする絡鳴市の真実。それを紐解く最初の鍵は、仮面ライダーフリード——到月陸とうづきりくの五年前の因縁だった。

目次

第一話 「怪人のいるマチ」	part 1	1
第二話 「怪人のいるマチ」	part 2	12
第三話 「怪人のいるマチ」	part 3	28
第四話 「動かぬケツイ」	part 1	40
第五話 「動かぬケツイ」	part 2	52

# 第一話 「怪人のいるマチ」 part 1

1

実験都市「絡鳴市」。

今から二十年前、サンドボックスという株式会社が大金をはたいて作り上げた実験都市の名前だ。ひし形に似た人工島の上にサンドボックスの財力をこれでもかと注ぎ込んだ、まさに箱庭。

灰色に包まれた風景は都市と言われることに一切の懸念をかわせない壮観さで、夜空に放たれる無機質な光は星を消し飛ばすほどの綺麗びやかさで、この街の存在を強く主張している。

そんな光景を一目見ようと他県・他区から観光に来るものは多い。さらには東京都に見劣りしないこの街に住もうと、移住してくるものもまた跡を絶たなかった。

だからか、唯二の連絡通路の片方がある南区にはいつぞや見たスクランブル交差点並の人集りが見えた。

ここまですばらく歩いた疲れを癒やそうと、瀬良康介は近くにあったベンチに自分の体重をすべて預けるように座り込む。

絡鳴市への旅はまだ高校生の康介にもさすがに応えるものだった。まず交通費がバカにならないほど高い。康介の地元から郊外まではかなりの距離なので、新幹線は万にも昇る高額。

そこはあえなくと夜間バスを利用したのが間違いだった。今やあの噂で持ちきりになった絡鳴市へ観光しに行く人達が多すぎて、バス会社がありつたけのバスを用意しても間に合っていないらしい。

手早く機内掃除されただけのバスに乗る羽目になったのだ。

その時の心情を語るとするならば——単純に最悪だった、と言っておくべきだろうか。

そんなこんなで辿り着いた時にはバスから降りた直後に盛大に吐いていた。

と、ほんの少しの一休みを置いて康介はまた立ち上がる。バスに揺

られて八時間、ついにやってきた目的の街。

ここはまだ絡鳴市へ来るための橋を渡ったばかりの場所ではあるが、そこは公園のような場所で、ここへ来たばかりの人、これから帰る人、そしてこの街の人で賑やかだ。

春の暖かな日差しを手で遮りながら少し遠くに焦点を当てる。康介の目に映ったのはごく普通の街の風景。

少しだけ遠くに見えるビル群。今の都会にはありきたりなコンクリートの舗装。観光者歓迎の為の出店細部への細かな行き届きぶりに、他の場所では考えられない大金が放り込まれているのを感じる。しかしただ街を観光してその感想を述べるために、康介は絡鳴市に来たわけではなかった。

「ここじゃまだ分かんないか……もつと、中心に近い場所まで行かないきゃ」

康介が焦りを押し殺すように独りごちり、足を行き先へと向けた瞬間だった。

「ああ……」

気の抜けた、やってしまったといった感じの声と共に、康介の目の前にボトルが何本か転がってくる。

それを拾い上げ、前方を見やると、サンバイザーを被った青年が慌ただしく同じボトルを追いかけていた。

「どうやらドジをやらかしたらしい。」

康介は人に冷たい訳でもないのです、こちらに転がっているボトルだけを拾い、サンバイザーの青年に差し出した。

「はい、落ちてましたよ」

「あー！ ありがとう……！ ぐざいま、す……」

サンバイザーの青年は段々と消え入るような声で礼を言い、ボトルを受け取り足早に去って行ってしまった。

その背中を見届けてから康介はため息をつく。

「失敗したなー。あいつらにも顔が怖いって言われてんのに」

と、ぼやく康介は目つきの悪い三白眼をゴシゴシとこする。

先程青年の調子が変わったのは康介の顔を見てしまったからなの

だ。生まれつきからの三白眼はどうにもガンを飛ばしているようにしか見えないらしく、少し顔を合わせただけであの怯えよう。

康介のちよつとしたコンプレックスである。

「はあ……今日ホントツイてないな」

この先もあんなことが続くと考えると改めて自分が怖くなった康介。

もう一度ため息をついていると、突然肩を叩かれた。

「どうした？ 行きたい場所がどこか分かんないのか？ それともここで暮らしていく不安で胸が痛いのか？」

その青年は異様に周りから浮いている、ように康介には見えた。

身長が康介より少し高いのに、その顔は少年と見紛うくらいに無邪気な笑顔を浮かべ、顔見知りでもなんでもない康介に声を掛けたのだ。普通、そこまでやる人はほとんどいないだろう。

康介は改めてその青年をよく見た。

白いカットシャツの上からオレンジのジャケットを羽織り、これまたオレンジのスキニーパンツ。頭から足までオレンジを基調にして揃えた立ち姿はこの灰色のコンクリートと相まって目がチカチカしそうだ。

「いや、別に困ったりはしてないんですけど……」

男の陽気なオーラに気圧され気味に身を引くと、それに合わせるように彼も前へずいっと出てくる。

「ため息吐くやつが困ってないわけないだろ。ほら、なんか手伝えることがあるんなら言ってみろ、邪険にはしねえよ」

「そんな人の良い事ありますか？ 俺は遠慮しますよ」

「まあまあ、そう警戒するな。他人の好意には甘えとけって」

「そこまで言うなら頼むよ。なるだけ中心に行きたいんだ」

「中心か。あそこはよく通るから知っておいて損はないな」

不思議と康介は納得してしまったが、青年はなんらおかしなことは言っていない。困った人がいるから助ける。模範的なお人好しの一例だ。

そんな訳で。

見事に懐柔されてしまった康介はこの青年——とらつきりく到月陸に行き先を任せている。

「ここらは美味しい飯を食わせてくれる場所でいっばいなんだ。よく通ってる」

「やつぱり他とは違ってこだわってたりするのかな?」

「そうだなあ、特別って訳じゃないけど、単に腕が上手いっていうのかな。変に気取ってないから注文は迷わない。その割に値段を上回る味を提供してくれるって感じだな」

「じゃあそんな冒険はできないってことか……」

「まさかお前ゲテモノ好きか? それだったらもつといいところがあるぞ。昆虫食だかを出してくれる店が——」

「いやいや! そこまでは冒険しないって! 意外な味を求めてるだけで、変わり種を探してるわけじゃないんだよ」

「そうか? あいつらも意外なもんだけどな……」

「食べたことあるのか……」

十分二十分も話していると、陸という青年には敬語を使わずにフランクに接していることに気づいた。

自然とした会話を交わしながら二人は繁華街を通過していく。

まだ真つ昼間の繁華街は照明が付いてるわけではないのできらびやかと言うまでではないが、昼時の腹を空かせた人達で忙しない。

「よし、そろそろ次行くかな。はぐれなんよ?」

説明するものがなくなったのか陸は歩くスピードを速める。

ここまでかなり簡潔的な説明と康介への受け答えだけで場を持たせている陸だが、康介はそれを退屈だと思わなかった。というより、別のことに気を取られすぎて陸の説明が気づいたら終わっているという具合なのだが。

それよりも康介が気にしているのは未だ普通の街にしか見えないということだ。康介にとっては収穫が得られないと分かった時点で、心に決めたある目的のためだけに親をなんとか説得した、今までの苦労が全て水の泡に終わるのだ。

「そうだ、あんたに聞きたいことがあるんだ」

だから康介はここで勝負に出た。

絡鳴市の住人である陸なら噂はではない本当の事が聞けるはずだと言うこと見越してのことだ。それに探偵だと言ったのは彼だ。あの書き込みを知らないはずもない。

「この街には怪人が居るって本当か？」

ただ率直に聴いたその言葉に振り向いた陸の顔は、予想以上に険しかった。

まるでバレることを恐れているかのような苦虫を噛み潰した顔だ。

「なんで今そんなことを聴く」

「知りたいからだよ。知ってるんだろ？ あんたなら」

対して康介は澄ました顔で問い詰める。

「それだけじゃ納得はできないし教えられない。例え今後顔を合わせる仲になったとしても知ることじゃない」

途端に陸の調子が今までの少年っぽさを残した口調から真面目なトーンで、異様なまでに食い下がる。

「それとも知るに値する理由でもあるのか」

ある、と出掛かった言葉を康介は咄嗟に飲み込んだ。突き放してでもこの件を口外する気がないように、康介が持つ『ある』と断言できる理由も容易に口外するものではない。

もし自分が事実を知ろうとするならギブ・アンド・テイクの覚悟が必要だ。

それでも康介は、

「ある」

短く切り出し、続ける。

「人探しをしてる。三年前、連絡が取れなくなった俺の家族だ。考えうる限りの友人と掛け合って見たが、その行方を知る人は誰もいなかった。けれど最近、ここに来た友人が家族を……兄を見たって。だから来たんだ。これが証拠だ」

そう言って取り出したのは真新しい手帳。その中間ほどのページを開き、陸に向けて見せる。そこには写真が貼り付けてあった。はつきりとしたデイトイールで、生物然とした人型のシルエットがしつか



りと残されていた。

「見せろ」

陸はそれを無言で手に取り、品定めするような目で見つめる。やがて諦念の込もった面持ちで口を開いた。

「目的地変更だ。中央よりの南方面に行く。そつから先はお前が感じて、考えて、判断して決めろ」

そう淡々と言い放ち、それ以降話すことはないという風に無言になった。

康介はその後ろを、ただ付いていった。

ついにわかる真実に固唾を飲んで。

そして、

### 3

陸は広場の前で止まった。この街で唯一地面に噴水が埋め込まれているここは、南フィールドと名付けられている。一部だけ円形に盛り上がった場所にはそれを囲むようにあるものが設置されていて、然るべき時に作用するようになっていいる。

何に使うかはいずれわかる。ちようどその状況に差し迫っているからだ。

それはさておき、康介という青年は非常に勇気のある人間だ。少なくとも陸はそう思った。この街に来たばかりなのに場に不慣れな余所余所しさが無い。まるでカメレオンのような適応力の高さだ。

だから陸は話を振られたとき陸は一瞬だけ取り合いかを迷った。ただの興味本位の人間にすべてを教えていいのかどうかを。それは杞憂だったが。

しかしそもそもその話、外部の人間に真実を伝えて何が起こるのかを考えたことがあっただろうか？

いままでずっと、街に怪人がいるというのは秘匿事項だったのだ。それを公にして何があるのか、その先に待つものは？

ここに押し込められていた怪人達がもし外側に漏れ出したら、大変

なんてもものじやなく取り返しが付かない域まで世界が荒れる  
……  
だが陸はそれを自分の考えられる範囲まで突き詰めた上で康介に  
話すことを決意した。真剣な顔で事の経緯いきさつを話した判断を陸は信じ  
た。

「ここがそうなのか？」

「ああ、ここさ。もう少しでわかる」

陸は短く返しながら円形のステージから出来るだけ離れた位置に  
立ち、懐からチョコレートを出して口に入れた。

徐々に集まり始める人達はやがてステージの周りに並んで行く。

ステージはかなり広く、レスリングをするには充分過ぎる大きさ  
だ。集まった人達で公園の大部分を埋めるのではないかと思われる  
ほど広がらなければステージをぐるりと囲めないようになっている。

その光景に康介は訝しげに目を細める。

物珍しい以前に人が大勢集まるというのを見たことがないかのよ  
うな顔だ。

(絵に描いたような田舎者って感じだね)

と、陸は適当に思考を散らし言葉を選ぶ。

「知りたいのは怪人だけってことでいいか？」

「そうだけど……何か違うのか？」

「いや別に。真実を教える前に話さなきゃいけない事があるんだ。と  
言っても毎回ある前置きの定例みたいもんだ。この真意については  
気にしなくていい」

「分かった」

康介の一言に陸はゆっくりと頷き、そして始めた。

「この真実を知ったら、お前はもう引き返せない。知ってしまったら逃  
げることが許されない、目を逸らす事もだ。それでも知る気は？」

「もちろんある」

「即答ってことはホントに覚悟があるんだなお前。……じゃあいい  
か。あれ、見えるだろ」

陸がステージに一番近い場所を指し示すと、そこには数人の集団が

2つあった。どちらもシンボルマークのように衣服の一部が決められた色で塗ってある。

片方は光沢のついた赤、もう一方は鮮やかな水色だ。

「あれはチームっていうんだ。チンピラとは違うけど、昔のカラーギャングみたいに特定の色で統一されてる。あっちの赤がメタリックコード。もう片っぱがドリームネオンって名前だ」

「ってことは、今はあいつらが戦おうとしてるってことか？」

「そうだな。チームは複数あるから、もちろん対立もある。ただこの街では、それをダシにしてみんな楽しんでるんだ」

「人がいがみ合ってるのを、娯楽に……？」

「まあ、嫌な気持ちになるのは分かる。でもこれを見たらお前も納得する。この満たされた街に不満を持つてるやつは案外多くてな。みんなストレスみたいなものを抱えてるんだよ」

そろそろ始まる、と話を切った陸は人集りに歩み寄り、ステージの上を注視した。もちろん康介もそれに倣う。

これから始まるのは確かに康介が言った通りいがみ合いだ。不良が徒党を組んでいればよくある、誰がやられたとかいう因縁による大騒ぎである。世間から見れば最も小規模な戦争だ。

だがここ絡鳴市の戦争はクリーンで管理されたものになっている。市から提供された道具、場所、ルール。そして、公に支援する代償が市民への娯楽の提供。

市はご丁寧にも動画サイトにチャンネルを設立して、手慣れたパースナリテイを置き、チームの競争を高めるためにランキングまで作ったのだ。

さすがは実験都市、というくらいにトントン拍子に事が進んでこの状況を作り出している。

ゲームと見て楽しむ観衆と、そのゲームを楽しむ馬鹿達の構図が。途端に観衆がワァー、と沸き始める。

両方のチームから一人ずつステージに上がった。

水色のトレードカラー、ドリームネオンの方は四角メガネを掛け、丁寧に七三分けにした真面目そうな青年。

赤色のメタリックコードは、丸刈りの野球男子みたいな風貌の青年。

どちらも喧嘩するには些ちかか頼りない身体付きをした男だった。

「これって具体的には何をするんだ？」

「殴り合いのゲーム」

陸の即答を合図にステージ上で立つ二人に変化が起きた。キイイン、という共鳴音と共に両者の周りを母指球（親指の付け根のふくらみ）程の小さな結晶が浮遊し始めた。

メガネの青年の方には紫のものが一つ。野球男子の方は黒のものが三つだ。

それと同時に身体的な変化も始まる。

体表を徐々に白黒のノイズに侵食され、鮮明なシルエットを濁す。もはやぼけぼけの人のようなものはゆっくりと形を変える。動いたのだ。

紫色の結晶が揺蕩うノイズは頂点にあった球が前に下がり、直立だった姿勢がやや猫背ぎみに曲がる項垂れたような格好。

黒い結晶が飛び回るノイズは球のすぐ下、右側に棒が伸びる。右腕を上げたのだろう。

そして二色の結晶はそれぞれの持ち主の身体へ埋め込まれ、不鮮明なシルエットが形を持った白い人型ひとがた、ヴォルトになった。硬質化した真っ白な甲殻が、なにかしらの動物又は物体めいた造形になるのが特徴の怪人だ。

肩甲骨の間に埋め込まれた紫の結晶が光るヴォルトは全体的にっつとした身体に、肘まで伸びる花が開いたようにぱっくり割れた長手袋と腰から真横へ広がるスカートめいた羽。シルクハットに似たパーツをつけた紳士風の風貌。呼称、フェアリー。

手の甲、前腕の中心、そして肩に黒い光が怪しく灯るヴォルトは、格子状の仮面、胸の左側にできた鍵穴型の窪みといった嚴重な雰囲気醸し出すデザイン。右肩にぼつぼつの突起、右前腕に剣、右手の甲に爪、左肩から手首に掛けて銃をイメージさせる彫り込みのある武器庫を元にして造形された身体。呼称、アームズ。

二人の怪人が互いを睨み合うように構えた。

一連の準備段階を経て再び湧き上がる観衆。と同時に、ステージ周囲のある結晶——とある装置が起動し、怪人達を囲むように電磁バリアが張られた。

「変わった……？　これって……」

「ヴォルトだよ。要は怪人。人が変身した怪人だ。これはそいつらが戦うゲームさ。まあ、あいつらの中ではヴォルトが怪人ってことは伝えられてない」

「それって騙されてるんじゃないのか!？」

「たしかにな。でもこのゲームはチームでの抗争もできるし、しかも安全で確実な決定方法。それに加えてスポーツみたいに観戦者も付く。だれがどう見てもwin-winだろ?」

『3』

ステージの装置からスタートのカウントダウンが始まる。

『2』

アームズは胸の鍵穴模様を弄り、フェアリーは長手袋を嵌め直す仕事をした。何ともなしの一挙手一投足で、緊張が見ているこちらにも伝わってくる。

『1』

「どっちが勝つかなあ……どうおも——あら?」

隣に目を移せば、そこにあるべき男の姿がなかった。背後を振り返っても、その後ろ姿すら見えない。

「なあ、側にいた目つきの悪いやつどこに行ったか知らない?」

「ん?　そういえばさつき走って行った気が……」

「ありがとな!」

まだ遠くへ行ってないことを祈り、駆け出す陸。

怪人の姿を知ってしまった者の末路は正直なところ前例がないから分からない。

それに怪人はあのゲームでのみ扱われる道具ではない。チームだけでなく、一般人にも渡っている。

しかしチームの側にいる人間は襲われることはない。だから陸は

早急に手を打っていた。

それがなくなるとはどういう事か。

「面倒なことになったな……!」

吐き切るように呟いた言葉は背後から響いた『ゲームスタート!』の音に掻き消された。

「どうしてだ……」

信じられない。

「どうしてだ……」

騙されているとは言え、人が自分から怪人になることも。

周りの人々がそいつらの殴り合いを楽しむのも。

「どうしてだ……!」

なにも理解できなかった。

ただ、一つだけ残っていた疑問は、陸はどうだったのだろうかという。

とりとめのないものだった。

しかしその答えを聞く前に康介は逃げてしまった。

今は一心不乱に歩いて来たであろう道を走って、必死にあの場なら離れようとしている。

だが、

「いたっ」

目の前を通りがかった通行人とぶつかる。いや、目の前に立ちふさがっていた男にぶつかった。

康介が気づいた時には既に、その男の身体をノイズが覆い、色の付いた結晶が周りを浮遊していた。

今程見てきた光景だったおかげで、すぐに男に起こっている現象の正体が分かった。

ヴォルトへと変身する合図だった。

男が真っ白な怪人へと様変わりする――。

## 第二話「怪人のいるマチ」 part 2

4

陸は再び康介とあった場所へと舞い戻ってきていた。道中にも気を払い何度か立ち止まって探したが、それでもあの目つきの悪い顔を見つけることができなかった。

「これはまずいかな」

自分の記憶を顧みても通った道以外は覚えていないし、ずっと一本になるように道を絞って選んできたはずだ。突然街をうろつき出すようなことは考えられない。ここから一秒でも早く逃げようとするだろう。

となると、最後の行き先がここになるのは必然的だった。

この街からバスが出るのはまだまだ先だ。

それがいないとあれば、辿り着く状況は最悪な可能性であることを考えなければならぬ。

チームの人間が遊び半分で新参者にちよっかいを出すか、それとも誰かが変身したヴォルトに襲われるか。

どっちであつても今から探すのは骨が折れる。なにせ追われているれば居場所は刻一刻と変わり続けるし、攫われていれば連れ込まれた場所を特定するのに時間がかかるからだ。

「やっぱり教えるべきじゃなかったか……」

不意に口を突いたのは後悔だった。確かに求めたのは康介だったが、促したのは紛れもなく陸だ。連れ戻さなければいけない責任は充分にある。

（おれの連れを襲った奴は誰だ？ 一番可能性が高いのは——）

早速と言った具合で思考を張り巡らせ始めた時、アタツシユケースを持った男が陸に声を掛ける。

「おーい！ こんなところに居たのかよ。恨みがましくコンクリなんて睨んで、どうした？」

「……いいとこなのにな邪魔すんなよ……ピーク」

ピークと呼ばれた男はオーバーに怯えた格好を取って「ウヘエ」と、ヒキガエルのような声を出した。

「なんだなんだ、お前がそんなに怒るのは久しぶりだなあ。誰だ!? 俺らのエースをここまでやる気にさせんのは!」

所々茶々を入れながら話すピークは吟遊詩人のように人の目などにせずに腕を振り上げる。

「オーバー過ぎるんだよピーク。確かにそいつのことは許さないけどな、お前がわざわざ来るのはどういった理由だ?」

「うん?」

「とぼけんなよ。そんな頑丈そうなケース持ち歩いてんの今まで見たことないぞ」

その言葉にピークはやつと「ああ」と自分のやるべきことを思い出したようで、手に持っていたアタツシケースに目の前に差し出した。

「こいつはお前への誕生日プレゼントだぜ」

「誕生日プレゼントは一週間前にあっただろうが……」

飽きれる陸を余所にピークの独壇場は終わらない。もはや放つておいても永遠に喋り続けるんじゃないかと言う勢いでポンポンと言葉をだす。

「そうだったか? あの日は俺だけなにも上げなかったじゃないか、その代わりと思っていいぞ! あとスパークも二、三本おまけしてる」

「いらないよそんな誕生日プレゼント。一本で充分だろうが」

「お前あれ弄くるの好きだろ? 数があつた方がやれることは多いだろ」

「いやいやいらんいらん。どれだけ備蓄が余ってると思ってるぞ、まだ三十本は残ってるぞ」

「そうか?」

アタツシケースを軽々と振り回しながら人をからかう。

この男に羞恥心はないのかと言うぐらい振り切った振る舞いには陸にも手を付けられない。悪ノリした時の恐ろしさは一級品だ。



「お前の中に真面目にやるって心構えはないのな。——ってそんな世間話してる場合じゃないんだよ」

唐突に陸が話題を切り替えると、自然とにやけ顔になるピーク。「おやおやあ？ 案外乗りツツコミ気味に気づいたな。このまま脱線したらどうなるかと思っただぜ」

ピークはわざとらしく哄笑した。

しかしここまでズラしたのはピーク本人なので、さして口出しすることなく陸は話をすすめる。

「この街に来たばつかの奴が誰かに襲われてる。名前は瀬良康介だ」

「ははっ、そいつはかなりの厄日だな……誰の線が怪しいと思う」

「おそらく一般人だろうな。それも俺達の始末対象に当てはまる人間で、最近騒ぎを起こしてる奴」

チームの人間はその殆どがヴォルトになれる。しかしだからと言って騒ぎを起こすのは彼らだけに限ったことではない。街の一般人だって所謂犯罪行為というものを起こす。

それも頻繁に。

理由は単純明快。鬱憤を晴らすための便利な道具が手に入るからだ。

「最近？ ……最近は全部解決したんじゃないのか？ 俺はそう報告を受けてるんだが」

「そうか……」

当てが外れて再び考え込む陸。

手軽に犯罪を起こせる、とは言っても毎年毎月行事の如く騒ぎが起こるわけではない。集中する時としない時のばらつきがあったりする。

今月は上旬に集中していたが、それらのすべては陸達の手によって解決されている。

今起こってる問題は、まだない。

「じゃあやっぱチームの作業じゃね？ あいつらもたまには自由に暴りたいときだってあるだろ。あんな事してたら」

とピークが暗に指すのはあのゲームのことだ。

だがその可能性がない確信が陸にはある。

「さすがにそれはない。言つてあれを頻繁にやるのはコードとネオンだけのはずだ。それもあいつら南(フィールド)で競り合ってるぞ?」  
「ん? だと、ちやっちい犯罪でもやらかしたんじゃねーの? あとは巻き込まれたとか? 消去法で行くんならやつぱそこに辿り着くだろうな」

「……………」

そこで話は停滞してしまった。

もし最後の結論が真実なら、助けるのにそこまで躍起になる必要がなくなってしまう。

と言うより、絡鳴市の人間はむしろそっちのほうがまだ身の安全が保証されるだけ安心できる。

ここはそういう街だからだ。

しかしそれでも、陸は搜索の手を緩めるわけではない。

それは未だに康介を信じているからに他ならない。  
「それでも探してみるよ。あいつはおれ達にとって必要だ。今を打開する一手を打てるような奴じゃないけど、あいつは気づいてくれるはずだ」

毅然と、そう断言した陸を見てピークは諦めたようにため息をつき、お手上げと言うように手を上げた。

「そうかい。だったら頑張れよフリード。俺は先月の事件の方に行くからな。ま、そいつ助けたら俺にも紹介してくれよ」

「考えるまでもないさ。絶対にこっちに引き込む。……あと、あんまりその名前で呼ぶなよ? お前に晴らしたい鬱憤が山程溜まつてるから——」

そこまで軽口を交わしあつたところで陸は気づいた。

聴き逃してはいけない言葉を聞いてしまった。

今、あいつはなんて言った——?!

「あっはっは、冗談いうなよフリード。そんなお世辞言つてもなにも出ないぜ? はっはっは……いや! ホント許してください陸さん!」

さつきまでのおちやらけた雰囲気から一転、倒れ込むように五体投地を始めたピーク。一糸乱れぬ動作はまるでパフォーマンスのように完成され尽くしている。

だが、お生憎陸あいにくの思考はピークの土下座をどう褒めるべきかを考えてはいない。

そして陸はその土下座に全く興味を示していない。

なので、

「なあ、さつきなんて言った」

「え？ 許してくれって」

「そこじゃない、もつと前だ」

「あー、えーと、冗談いうな？」

「違う、全然違う！ お前は記憶力がないのかあ!?!」

「あ？ こっちは何がなんだか全然わかんねえんだよ！ いつつも

いつつも仕事サボりやがって！ 報いを受ける報いを！ 後、借りた

金返せ！」

「お前らの押し付けた仕事なんてまっぴらごめん！に決まってるんだろ！

そんなやつに金なんて返せるか！ おれはやりたいたいようにやる、文

句あんならかかってこいよ！」

と、このように会話の齟齬そごから始まる不毛な取っ組み合い、又は言

い合い、その名を喧嘩。

ただ、これが起こってしまったのは二人が極端に短気だからだ。

そんなわけで観光客が集まる公衆の面前で争い始めた二人。特に

陸については、急がなければいけない用件も忘れて突発的な怒りに身

を任せている。

今しがたも、綺麗にピークのボディに入った拳を振り上げて次の一

発を用意している。

負けじとピークも突撃するが、軽々と叩き落とされ胸ぐらを掴み上

げられ、陸の臂力によって向こうへ投げ飛ばされた。

その怪力つぷりに思わず周りもおお……、と感嘆の声を漏らし、飛

んでいったピークに視線を集中させている。

陸はその隙を突いて人混みに紛れた。逃げたわけではない。あの

やり取り一連、一種の演技だ。ピークも暗黙に了承した上でやったことだ。

そんなことをしたのはピークとの会話で少し思い出した事があったからだ。

最近の一般人による犯罪は起きていない。チームは小競り合いに夢中で人員を人攫いに回すことはない。

そして——康介は犯罪を起こすような人柄をではない。

ピークが最後に言った言葉を、陸は反芻<sup>はんすう</sup>する。

「先月はまだ解決してない。おれの言い方が悪かったかな。いや……アイツの事だ、譲れないことでもあったんだろ」

そう呟き、今しがた振動したスマホをポケットから取り出す。液晶に写ったものを一瞥すると、陸は歩く足を早めた。

5

無数のコンテナが迷路のように積まれたコンビナートを利用し、康介はガタイのいい身体を必死に隠していた。

もはや絡鳴市のどこにいるのかも分からないこの状況で、本能が絶えず発することはただ逃げること。あの怪人、ヴォルトから逃げることだった。

どこまで逃げてもの確に位置を割り出して襲ってくるという脅威的な索敵能力でここまで追い詰められてきたのだ。

「どうなってんだあのバケモン!! なんて分かるんだよ!?!」

康介が焦り気味に叫ぶ。

どんなに工夫を凝らして身を隠しても、必ずものの数分でやってくる。それを幾度となく経験し、康介の脳内はパニック状態になっていた。

「見つけたぞ……。今度は逃さない」

「ッー」

加工されたような低い声を出し、コンテナの合間に降り立った真っ白な人型。

のつぺらぼうのようにまっさらな顔に、口元から球体型に盛り上がる歪な形状の頭。側頭部から斜め上に伸びる二又ふたまたのアンテナが二本。顔を横切るように浮かぶリング。身体を覆うのはマス目で敷き詰められた修道服のような、膝下まである蛇腹装甲。左腕の甲側には丸い球体が三個嵌め込まれ、右肩には白く濁った結晶が埋め込まれている。呼称名、オブザーバ。

よく耳をすませばモスキート音めいた澄んだ音が辺りに響いている。

「う、うわアアあああー！」

何度も見たオブザーバの姿にもはや康介は恐怖以外の感情を抱くことができない。

コンテナの迷路を抜けるために通って来た道を全速力で引き返す。「待アてエエえええええ！」

恨みがましく声を発するオブザーバは振り返らずにただ走る。今までそうやって逃げてきた。今回、この場もそうするだけだ。

しかし、そう今回だけは。あちらも痺れを切らしていたようだ。

オブザーバは左腕に嵌っている球体を取り外し、それを康介の逃げ道の方向へ放った。

ゆったりとした速さで飛ぶ球体はそれほど速い速度ではないものの、氷の上を滑るように悠々と康介の頭上を通り過ぎていく。

不思議なのは一直線に進まず、ゆらゆらと軌道がズレているはずなのに一向に高度が下がっていく気配が見られないことだ。

原理はどうであれ、球体が爆弾でない限りは道を塞がれる危険はないと踏んだ康介が少し足の回転速度を上げた時だった。

オブザーバは唐突に「やれ!!」と端的に叫んだ。

すると、今までふわふわと浮かんでいた球体が途端に加速し、脇道に積み上がっていたコンテナの塔に突撃した。

その時に起きた振動に足を取られ転ころけてしまう。

逃げ道を塞がれた焦りよりも目の前にうず高く積み上がっていたコンテナが次々と落ちてきたことに康介は肝を冷やす。

これでは逃げてでも逃げなくても殺されてしまう。

相手はもはや人智の域を超えた怪物。どれだけ策を凝らそうがすべてを突破し追い詰めてくる。

この小一時間で自分が知ろうとしている事実が圧倒的な絶望であることが理解できた。

既に目の前にはオブザーバが迫ってきている。

「う……ああ……い！」

康介は声にならない怯え声を喉から絞り出した。

絶望はもう目と鼻の先。

オブザーバが再び腕に嵌った球体を真上へ投げた。

——もう逃げ場はない。

そして、右腕を上げて球体を指差す。

球体がピタリと止まった。

——もう時間もない。

「終わりだ……い！ 死ねえエエええええ!!」

咆哮を上げ、ひと思いに、力任せに、今までの鬱憤を叩きつけるように振り下げた。

球体はオブザーバの操作能力で急加速を得て急降下。豪速球のスピードで康介に迫る。

——もう、ダメだ！

その絶望に折れかけた時、

カキンッ！ と甲高い音共に球体に火花が散り軌道が曲がる。

落ちた先はへっぴり腰になった康介のすぐ側。まさに危機一髪の横槍が入ったのだった。

それはある意味で康介が秘かに期待していた存在。

到月陸からのものだった。

「余裕で間に合ったね。見てから迎撃余裕でしたと……」

飄々と言葉を並べる陸の手には大口径の拳銃。警察や軍のものではない、珍妙なデザインのものが握られていた。

康介もオブザーバも唐突な闖入者ちんにゆうしゃに啞然あぜんとする。

そんな様子にもう片方の手になぜか携えていたスマホを構えてシャツター切った。

先程撮った写真をSNSアプリで、「ヴォルトを見つけた。これから始末する」というコメントに添付して上げる。

上げた場所は特定の個人。トーク画面に映るのは『ピーク』という文字だった。

履歴には「南西のC―B地点にヴォルトがいる」のコメント。ピークと別れてから数秒後の送信だった。

陸はこれを元にヴォルトを追ってきた。

この未解決事件の犯人を。

だがオブザーバの事よりも先に、陸にはやるべきことがあった。

オブザーバへ手に持つ拳銃を向け二発程光弾を叩き込み、呆然とこちらを見上げる康介に近づき目線を合わせた。

「どうだ？　これが真実だ」

陸の口から出た言葉は心配でも軽口でもない。ただ突きつける事実。ヴォルトになるのは一般人も含まれる、だから『怪人だらけの街』なのだ。

「分かってたよ……！　間近で感じれば……っ。あんなの、人の手に負えるやつじゃない」

「じゃあ、それでどうする、お前は。このままどうしようもない中で死にたいか？」

慰めるという気遣いすら感じられない冷たい言葉を投げかける。

康介は一度苦渋の色を浮かべて俯く。が、すぐに顔を上げると陸の胸ぐらを縫るように掴んだ。

「なあ、助けてくれ……。助けてくれよ!!　あんた怪人について知ってるんだろ!!　あのどうにでもできないやつを、なんとかしてくれよ!!」

掴みかかる康介に畳み掛けるように否定した。

「馬鹿か。どうにでもできないんだからどうするもないだろうが」

自然と胸ぐらを掴む力が弱まり、康介はへたり込んだ。

現にヴォルトに対抗する手段が人間にはない。それは役職を変えたとしても見解に変わりはない。

そこにいるのは絶対的な強者だ。

しかし、それは人間だったらの話。

「でもな」

その一言で康介の顔を上げさせる。

「怪人だったらどうにもできないわけじゃない。対抗するやつことだってできる。いろんな理由でな？ だからお前に一つ提案をあげよう」

人間でなくなればヴォルトに対抗できるというわけだ。

拳銃の撃鉄部分に付いているスロットから注射器型のシリンダを取り出し目の前へ差し出す。

つまり、

「怪人に立ち向かうための力。怪人になる力。おまえに……それを受け止める力はあるか？」

——対等になりたければ同じくあれと、陸は提案した。

目の前に突き出された希望に目を向け、康介はそれに迷わず手を伸ばす。

しかし、

「ダメだ」

一言言って慌てて手を引つ込めた。

「俺には……そこまでの覚悟がない。すまん……」

そうして罰が悪そうにそっぽを向いた。

陸は康介が選択した答えに、シリンダを掴み直し空を仰いだ。

「そこまでは無理か」

暢気に言ってみるが、その場が変わるわけではない。だがつい口に出さずにいらなかった。

自分の賭けが失敗したという事実に向き合う為に。

しかしそんな感傷に浸る時間もなく、怯ませていたオブザーバが復活した。

右肩の結晶が瞬時に二本の二又アンテナがついた球体になる。



オブザーバがその片方を手に取ると、そちらのアンテナが槍の柄のように伸び、逆のアンテナは三又みつまたに拡張し、杖のように変化する。

「お前は誰だ!? そいつの仲間か!？」

杖の三又の先を向け問いを投げかけるオブザーバ。

「仲間っていうか、今日の仲だな。でもそんなこと聞いてどうするよ。どうせお前は全員殺すだろ? ……俺もだよ、クソ野郎」

「っ! お前もオレを見下すのか!」

「当たり前だろ。今までお前が何人の関係ない人を手にかけて知ってるか!？」

怒号に合わせて再び光弾を放つが、今度はしっかりと反応したオブザーバの杖による攻撃で防がれる。

「お前が人を観測して得たのはただの自己満足だ。ヴォルトになつてまでそこまですか進化できないのなら、お前はそれだけって事だよ」

「クソオオオオ! 好き勝手言いやがって、殺す!! 殺してやる!!」

その次はそいつだ!!」

「殺れるかな? お前に。——制圧してやる」

陸はシリンドラを再び拳銃にセットし直すと、ポケットに入っていたスマホを康介に投げ渡す。

「持つてろ。ぶつ壊すとまた怒られる。あとごめんな、巻き込んでまっつて」

「な、なんで……?」

「理由を問いただした時、お前の覚悟はひしひしと感じられたよ。私情の為に恥も外聞も考慮しないお前のやり方がな。でも矢面に立たせる気はなかった。これだけはおれの責任だ、謝る」

陸は腕を顔の前へ上げ、手応えを試すように指を開閉させる。

自分にしか理解できないパラメータを確認し、ヴォルトへの変身能力を起動させる。

甲高い共鳴音と共に現れる橙色の結晶が五つ。身体を白黒のノイズが覆った。

ゆつくりと左腕を掲げると同時に結晶が嵌まり、簡素な左腕のみ形が鮮明になる。それに続くように他の結晶も左脛、右大腿、右上腕、そ

して胸部の中心へ嵌まった。

現れた姿は一番シンプルだった。バトルスーツに包まれたような全身。結晶を埋め込んだような鋭い形の目と、額から後頭部まで走る鋸刃のこぎりばの頭。そこには入れ墨のようなイラストがプリントされただけで、それ以上なんの特徴もないヴォルト。

しかし、これは手に持つ大口径の拳銃——型の起動器の作用だ。扱いやすいように、適合しやすいように、多種多様のヴォルトの形をプレーンな状態まで変調した姿。

そしてここからが起動器——トランスドライバの真骨頂が始まる。完成された真っ白な人型の配色がツヤ消しの黒に塗りつぶされる。それと同時にドライバが搭載する機能が動作を始めた。

『Type Unbreaker』  
全身に嵌められた結晶が一齐に電撃を放ち、陸を護るようにリングへと形を変えた。

リングの内側では各結晶の部位に合わせたアーマーを構成され、ひとりでに結晶を覆い隠すよう自動装着される。

アンバランスな姿は、装着されていたアーマーから追加の簡素なアーマーが展開し、所々穴のある防御機構でありながらもしっかりと身体を守る。

さらに顔を保護するように鋸刃のみ露出した仮面、鋭い目を保護するつり目気味の複眼と、右耳へ後方にアンテナの伸びるヘッドホン型の耳当てが装着された。

すべての過程が終わると、身体中の装甲が一度分割、合体し、その時バチイッ！ と全身から派手な火花が散った。

「武装全解除……ふう、感覚はいつもと一緒だな」

ドライバの拡張パーツと補助武器を収めた両腕装甲と仮面のようなヘルメット。重厚に着込んだ黒いヴォルトになった陸はオブザーバに向き直る。

それを目にしたオブザーバは今までの高圧的な態度から一変。急に怯えた声を上げる。

「お前！ 仮面ライダーとか言う奴か!？」

「そうだな。噂に聞いてたのにまさか自分になるとはとんだ巡り合わせだよ」

陸は実に暢気のんきな笑い声を出し、トランスドライバの銃口をオブザーバに向けた。

「来いよ。殺すんじゃないのか？」

「うっ、うおおおおお！」

オブザーバが杖を前に突き出し突撃する。

陸は冷静に銃爪ひきがねを二度三度引いて対応した。

銃口から放たれる光弾は数分の狂いもなくオブザーバの懐へ入り込むが、オブザーバはそれを杖で容易く弾く。

その防御の隙を突こうともう一度銃撃態勢を取り、銃爪に指をかけたところで杖の間合いに入られたようだ。目一杯長めに持たれた雑な振りの杖でドライバを弾かれてしまった。

「しまった」

ドライバはくるくるとオブザーバの後方へと滑っていった。

「はははっ！ 大口叩く割には戦いに不慣れじゃないか!! 簡単に殺せる！」

オブザーバは強気に吠えると短く杖を持ち直し陸目掛けてそれを斜めに振り下ろした。

杖と装甲が真正面からぶつかり火花を散らす。

陸は「ぐっ……！」と呻き身体の不バランスが崩れた。しかし辛うじて倒れかけた身体を踏ん張って止める。

「大したことないな、仮面ライダー！」

すると杖の三又のアンテナの一本が湾曲して伸び、刃が生え、鎌のようになる。オブザーバが人を殺すために杖から進化させた姿だ。

(まさかコンセプトとは逆に進化してるのか。これはこれで意外だ！)

内心驚きを示しながらも、鎌を引かれる前に腕で真上に弾き飛ばした。

陸にとつてかなり苦肉の策ではあったが、相手の跳ね上がった腕を瞬時に判断して後ろへと跳ね飛ばす。しかしそれでも少しの距離しか

開けていない。

すぐにでもオブザーバの攻撃が開始される。

接近を許した陸に再び鎌になった杖が振り下ろされる。

今度も逃げられずに攻撃を受け入れた。刃に引掛けるように振られた一撃だ。完全に身体を寸断されてもおかしくはない攻撃だが、「でも惜しいんだよなあ。ヴォルトは確かに進化してる。……だけど人を殺す奴の思考としてはまだまだ素人だな」

陸は杖を持って腕を掴み、それを阻止していた。

有無を言わず空いた方の拳をボディと顔に数発叩き込む。と、途端にオブザーバがよろめく。そこを狙って杖を叩き落とした。

「なぜだ!? お前は遠距離型のヴォルトじゃないのか!」

「人が銃を持つてるからって、あるべき可能性を捨てるのは間違いってことだ。覚えとけ!!」

陸は弱るオブザーバのガラ空きの胸を鋭くアッパーでかち上げた。オブザーバが軽々と宙へ浮く。

「さて、フィニッシュは必殺技だ」

空高く飛ばされるオブザーバを見上げ、陸は転がっていたドライバに駆け寄ると、拳銃に当たるスライドの部分。ドライバの銃身を包むカバーを引つ張り、そして離す。

『ストライク・ボルト!』

音声を放つドライバを投げ捨て自らも高く跳躍。肩まで引き絞った左拳に火花が散り始める。

すると丁度落ち始めてきたオブザーバとすれ違う。その瞬間、振りかぶっていた拳を顔面に打ち込んだ。

インパクトの一瞬に拳から充填されていた高圧電流が一斉に放出。指向性を持った電撃の槍に形を変えオブザーバを貫いた。

オブザーバの身体が地面に叩きつけられると、真っ白な身体に白黒のノイズが走り、見る見るうちに人間の姿に戻った。

その顔はサンバイザーを着用した冴えない顔の青年だった。

無事着地した陸も変身を解き、青年に近寄る。

「もう抵抗はしないよな? 散々苦労させやがって。ほら、お前の名

前を言ってみろ」

「深川、ふかがわ強」

深川は観念したように答えた。

「深川、と……。そんで？ あいつを襲った動機は？」

陸が顎で指し示したのは未だ地面にへタレ込んでいる大の男、康介だ。

顔に似合わず驚いた格好から崩れない所を少しシユールに感じた陸はすかさず予備のスマホを翳しカメラアプリでシャッターを切った。

「ちよっ!? 何撮ってんだよ!？」

ようやく立ち上がった康介が何か言いたげに陸へと歩み寄ったが、深川の顔を見ると、康介は「あっ！」と声を上げた。

「俺がこの街に来たときに商品落としてた売り子！」

康介が指指すのを深川は睨みつけて返した。

「お前も他の奴らと同じだ。僕を見下してくる！」

「おっと？ お前もしかして喧嘩を売ってくタイプなのか!？」

茶化してくる陸を無視して康介は深川に掴みかかった。

「見下してくる？ 俺はただあんたが物を落としたから拾おうとして

……！」

「それが見下してるんだよ！ バカにしたような目で見やがって！」

「なんだとてめえ!!」

「待て待て待て！」

ヒートアップした康介と深川を一旦離し、陸は話に割って入った。

「そんなちやっちいことで喧嘩してんじゃないよ、子供じゃないんだから。深川、お前はあとでそれ相応のところに任せる。あとお前はおれと来い。これでこの話は終わりだ」

「おい！ 待てよ!! 俺はあんな被害妄想で追われてたのかよ!？」

「そんなもんだ。一般の怪人騒ぎの殆どは、人の内面的な問題が主だ。普通大事にするべきじゃないんだよ」

鬱陶しそうにそう言った陸は深川に注射器型のシリンダを刺し、深川の所有していたシリンダも回収する。

これがヴォルトに変身する一般人への処置だ。変身できないようにアンチ成分を打ち込み、再使用を阻止するためにその道具も押収する。事故再発を防止するためだ。さすがにチームの人間にこのルールは通用しないが。

連絡も付けたところで陸が踵を返して帰ろうとするが、康介は尚も突っかかってくる。

「本当にいいのかよあんなんで!」

「良いんだよ、あんな感じで。いままでもそうだったんだから」

適当に返した陸の足取りは少し重い。

これから面倒なことが起こると思うと尚更だ。

後ろをいちいち気にしている康介を尻目に投げ捨ててあったドライバを拾うと、スマホが鳴った。

電話の着信のようで、数秒おきに鳴動する。

画面を見ると、呼び出しているのはピークのようだった。

「おれだ。……ああ、後でな」

「さつきから何やってんだ？ それに付いて来いって……」

「なんでもない、じゃあ行くぞー」

「あつ、おい」

ポケットから取り出したチョコレートを口に放り込むと、陸はマイペースに歩き出した。

### 第三話 「怪人のいるマチ」 part 3

7

絡鳴市、柳の木が所々植木された自然溢れる西フィールドを北に行ったところにある商業地域。専ら社会人の顧客を狙って経営された飲食店が立ち並び、競うようにその門構えを主張している。

その中の一際背の低い3階建てのビル。ある階を除いて店の看板が下げられたビルの前に陸と康介はいた。

「まだなのか？」

「あともう少しだ、ちよつと待て……」

絡鳴市の日常生活の快適化というものは著しく発達しているらしく、普段意識して目に入るものではないがちよつとした所に目を向ければその技術の進歩が覗ける。

例えば、いまここにあるビルのセキリユティシステム。たった3階であつたとしても強固なもので、マンションに備えてあるような、部屋番号を入力しないとエントランスすら辿り着けないというセキリユティが少し改変されてこのビルに実装されている。

他にはそこらにぽつんと置かれた自販機やバスの乗車賃金の支払いなどは殆どおサイフケータイ対応済みだったり、なにかと地味なところで目につく。

その恩恵を一年半も受けている陸はビルのセキリユティにやきもきしているわけではなく、その隣にある自動販売機の液晶と睨み合っていた。

「おっおっ!?!」

そんなこんなで興奮気味に拳を固める陸。

液晶には四つの数字が表示されていて、既に「3」の文字が三つ並び、あと一個の数字はデタラメに入れ替わっている。

つまりはスロットのようなものだ。

すべてがゾロ目で揃えば特典が貰えるという、当たれば気持ちちよつとだけ幸せぐらいのおまけ。

だがそれに賭ける情熱が陸は違った。

「あたれ、あたれ、あたれ、あたれ……」

止まない興奮の挙句自販機をグーで叩き続けながらお経のようにぶつぶつと呟き始める。

あまりの熱中度合いに、付き合わされた身の康介は呆れながらも事の顛末を見守っていた。

ピピピ……と連続して鳴る電子音のテンポが段々と下がっていく。液晶を見る陸の目がカツと見開かれた。

止まった数字は「2」。

言わずもがな外れだ。

と、途端に陸の調子がいつもの少年地味な軽薄な雰囲気になる。

「ちえー、なんでこういうのって当たらないもんかな。いつもギリギリな数字で止まるのは全機体共通なのか？ ほんつと渋すぎ」

「普通そういうものじゃないのか？ ただの娯楽だろ」

そう切り捨てるような発言をした康介はビルの玄関を指差す。

「ってか早く行かないのかよ。ここに案内するために連れてきたんだろ？ あんたそういうの得意じゃないのか？」

「そんなわけないだろ、ちよつと気がのっただけで普通はやらないんだよ。……あーあ、これで当たればもう一本買えたんだよなあ、液体チョコレート。この前やったパチンコを思い出すよ」

渋々と自販機を見つめる陸の目に映るのは、側面のラベルを泥のような茶色で塗りたくったアルミ缶のサンプル。

知る人ぞ知る本当の通し<sup>つうし</sup>かまともにも飲むことができない悪魔の商品だ。ちなみに中身が固まらないようにあつたかいの欄にある。

当然康介はそんな事を知らない。軽く首を傾げて苦い顔をする。

「よく分かんねえけどあんたって相当変なやつだ」

「伊達に何ヶ月もダラダラしてるわけじゃないからな。ま、今日は諦めといてやるか……」

と、妥協の意を示した陸は最小限の目線移動でこちらを見ている人がいない事を確認し、自販機に鋭く蹴り込んだ。

鈍い音と共に自販機の取り出し口にアルミ缶が現れる。



それを取り出し、自販機の金属板で作られたフレームを友人にするようにバンバンと叩き、

「貰つとくぜ、今回はこれで許してやる」

してやったりな笑みを浮かべる陸は、そのままエントランス前に備え付けられた公衆電話のような機械に近づく。

「なにやったんだよ今の」

「簡単さ。自販機のボトルやら缶やらを貯め込んだケースには嚴重なロックが付いてるわけじゃないだろ。むしろ中身のレバーを操作しただけで全部排出させることもできる。そこについて、そのレバーの動作を誤認させる衝撃を与えたのさ。まあ、やったとしても無駄な努力に終わるし、まずやろうとも思わないでしょ」

0と9の数字がプリントされた銀色のボタンを片手で流れるように叩き、下の横長の同色のボタンを押した。

それだけでガラス張りのスライドドアがひとりでに開いた。

「でもそれってやばいんじゃないか。バレなかったのかよ」

床に薄っすらと自分の姿が映るぐらい磨かれたエントランスに足を踏み入れ、既にエレベーター前までたどり着いていた陸は悪戯いたずらげ気な笑顔で振り向く。

「知ってるか？ バレなきや犯罪じゃないんだぜ」

やけに軽快な音を立ててやってきたエレベーターが開いた。

8

陸が所属するチームの本拠地はビルの2階に設けられたテナントの一室を借りて作られている。

西日も東日も受けない方角に窓があるため、朝も夕方も快適に過ごせる部屋は、一応と言つていい簡素な衝立でいろいろな部屋、または個室に区切られている。

入り口は長机とパイプ椅子のみのカウンター。そこから繋がる少し広いエリアはチームのたまり場として殆どの主要メンバーがたむろする場所だ。敢えて名前をつけるなら応接間といったところか。

乱雑に置かれたパイプ椅子はチーム内に几帳面、又は真面目な者がいないことが伺える。

しかし今日だけはその適当な置き方が、キャンプファイヤーを囲むかのように、雑ながらも綺麗な円を描いていた。と言っても囲んでいるものは康介で、陸以外そこで円になるものはいない。

その中の椅子一つに腰かけ、陸は懐から大口径拳銃であるトランスドライバを取り出す。

「お前らさ、こっぴつ秘密兵器渡すんならもつと事前告知とかないのか。こいつマニュアルすら同封されてなかったぞ」

恨みがましく愚痴を溢す陸に反応したのは衝立の向こう、カウンター席に座っていた女。いわゆる看板娘的存在の女だ。

「だってあなたが言ったことを全部やっても全く本気にならないでしょう？ みんなの意見としてはぶっつけ本番に投下してやれと一致したんです」

「うっわ。うっわ！ グルでいじめとかしようもないことしてんなよ。いち おお、う、実力差でなんとか退けたけどさ、チームメンバーぶつけられてたらワンチャン素で殴り倒してウインしてたぞ」

「結局勝てるんだからいいじゃないですか。さすがエース、と言った感じで」

にこやかに敬語で接する彼女はラツキイと呼ばれている。

陸のフリードやピークもそうだが、彼らのコードネーム的な渾名は命名の経緯が全くわかっていない。フリードに関しては現リーダーがつけたが、その他は名義上前<sup>ぜん</sup>リーダーのつけたものらしい。

円の中心で立たされている康介はもちろんこの事を知らないの、心を無にして立ちっぱなしの苦しみに耐えている。

「そ、そういえばあのヴォルトって、なんなんですか、かつ」  
やや苦痛に満ちた声。

さして気にする素振りも見せず陸はふんぞりかえった。

「前に見せたシリンドラがあっただろ、あの注射器みたいな。えーつと……」

オレンジ色のジャケットの裾に手を突っ込み、二つの半円がついた

プランジヤーに二本の指を引つ掛けて取り出す。

「これだ」

注射器と陸が言ったとおり円筒型の本体に、持ち手となっている可動しないプランジヤー。円筒の逆側はすぼまっているものの注入口になる針も穴もなく、真つ黒な端子が突き刺さっている。

「こいつの名前はスパーク。出自とか由来とかそういうのは聞かないほうがいい。ま、要するに殺人兵器だな」

「いいっ!？」

「そんな身構えるものじゃないさ。人の脳に特殊な電気刺激を与えてヴォルトの為の能力を引き出すってだけだ。昔は電流使ってたから感電死とかあったけど」

「それ大丈夫じゃないと思うんだが……」

「そうだな。実を言うとおれはそんなときのやつを使った世代だ」

ぎよつと目を見開く康介。

それにわざとらしく哄笑して見せると、陸はスパークの先端を首筋に当てる。

「でもその大きい電流で生き残ったやつはおれ以外にもちゃんといてな。それよりも前だっている、ピークとかこのリーダーとか。今は黒焦げ死体が見つかるなんてないんだけどな」

スパークは元々即死させる程の電流を流し込んで楽に死なせるための人殺しの非道兵器。製造元秘匿も相俟ってスタンガンよりも危険なそれを誰も欲しがろうとはしなかった。

しかしある日起こった事件以後、言伝で広まった噂により『トランス』という能力を得られることがスパークの運用を実用化させた、らしい。らしい、と言うのは誰が作っているか、誰が兵器を道具まで改良させたのかすらわからないからだ。

現在出回っている9割方のスパークは様々なルートから仕入れた流通品だと言う話だ。そのルートも毎度毎度変わっており、人力以外でも特定ができない。

「おれ達ヴォルトはそうやって生まれた。経緯はどうであれ、どのチームでも主戦力だ。でもそれが街中にもばら撒かれてるとなっ

ちや欲望<sup>エゴ</sup>を達成するには過ぎた力だよな。怪人<sup>キョウジン</sup>って言わてるのはスパークを偶然手に入れた奴ら<sup>やつら</sup>ってことだ」

その例がああ深川強という男だ。被害妄想で自分を見下していると判断した人間を一方的に甚振<sup>いたぶ</sup>る。彼は拳句<sup>ケンク</sup>の果てに殺害まで至っていたようだったが、その真意をおおよそ知ることはない。と言うより沈静化後は警察の管轄だ。こちらが手出ししても得るものはなにもない。あるとすれば誰からスパークを貰ったかという入手先に関する情報ぐらいか。

ともかくこの街の実態は得体が知れない。

未だ黒幕は掴めないし、そもそもスパークが起こす原理すら曖昧。ここ二十年もその謎が解かれないせいでわからないことが多いのだ。

「そしてそれを制圧するのがおれ。暴れてんの制圧して、スパーク押収して、情報を引き出させる。同じくヴォルトであるおれの役割だ。今日からは仮面ライダーになったけどな」

そう言つて陸は得意げに胸を張る。

「でも戦うのはあくまでそのヴォルト<sup>ヴォルト</sup>って言うのだから？ スパークだって信用できるものじゃないんだから、いつか不具合が起きるとかないのか？」

「いや、実はないんだなそれが」

と、唐突に陸のものではない男の声<sup>オト</sup>がたまり場に入った。それに目撃<sup>メキ</sup>く反応したのはやはり陸。

「おつ、生きてたかピーク<sup>ピーク</sup>う！」

「生きてたかじゃねえよ。てめえが犯人<sup>犯人</sup>だろうが！」

「ハハハハ、それもそうだな（棒）」

いつものノリで談笑<sup>タンシャウ</sup>するかと思いきや、すぐさま陸が切り返す。

「そんで、またなんかあつたんだろ？」

「ご名答<sup>メイタウ</sup>。ちよつと気になるやつを見つけてな。ちよつくら偵察<sup>テイサツ</sup>してほしいんだよ」

「ふん？」

その言葉に陸は少なからず疑問を抱いた。

他人が聞けばただの依頼に聞こえるかもしれないが、ピークという男がこの街にいる人に関して興味を向けることはおかしな事なのだ。彼は言うまでもなくヴォルトであり、呼称名はライブラリ。調べるというよりは検索すると言った具合の探索能力は、チームの確かな歯車を担っている。その性質上、ほとんどの人は素性、趣味、性格を正確に調べ上げることができる。

そんなピークが気を惹く存在は異質ということだ。

「なんだ？ 情報タダで渡してやったんだから相当の対価しろ」

もしもの時にかんりの危険を承知しなければならなかったが、

「うん、まあ……そうだな。やろう」

断る理由もないので承諾した。

9

ピークに指定された位置。

そこは住民の憩い場である公園だった。

他と変わらず、雑草の生えた地面が露出する子供の遊び場以外は、コンクリートで覆われた灰色の公園。周りは住宅街に囲まれているが、近々マンションかアパートが建つようで、ビニールシートに周囲を囲まれた四角い建造物がそこかしこにある。

子供連れの女性や男性が、休日の午後をのんびり過ごそうと休んでいる近くで陸（と康介）は予定の人物を探していた。

「さてさて目標は〜と……」

ベンチにふんぞり返って陸はきよろきよろと辺りを見回す。

しかし公園にいるのは親子のオンパレードだ。時折リア充が混じってはいるが、目に付くような者は一向に見当たらなかった。

と、油断していると不意に隣にいた康介が陸の方を向く。

「さつき出るとき、あのピークって人に言われたんだが、「気苦労させてやるな」ってどういう事なんだ？」

「それって本人に黙っとくべき事なんじゃないのか……？ 言っとくけど、ピークの言うことはほとんど中身がなかったりする、覚えてお

いて損はない。でもまあ、それに関しては……働かせすぎておれに苦  
勞させてんじゃないかってことだな」

「なんだそれ」

「深い意味はない。おまえが気にしてないんだったらいいさ。そうい  
う事だからな」

そう言つて曖昧に話を切った。

康介はなにかに納得したのか「ふーん」とだけ言つて親子に視線を  
移す。

今度は逆に陸が彼の横顔を見た。

なんていうか真つ直ぐだな、と陸は思う。

高校生だから話の中身をそれほど考えているわけではないのかも  
しれない。しかし重要な事の取捨選択というものが康介には出来て  
いる。

全部を全部抱え込む陸とは大違いだった。

陸は初めからチームのエースと言われる存在ではなかった。

今まで積み上げてきた苦悩があった。苦悶があった。苦勞があつ  
た。その全てに折り合いをつけたとは言い難いし、無理矢理切り捨て  
てきたものもある。未だに拭いきれていないものだって幾つか散ら  
ばっている。

それらが陸という男を、昔から変わることのない甘党でサボり常習  
犯の不真面目でくよくよ思い詰める人間を形作っていた。

だから今も悩んでいる。あの深川強という男が起こした事の真意  
を。

「そういうのやっぱ羨ましいよ」

「ん?」

「なんでもない。さ、早くピークの言う興味深いやつを探そうか」

そう思考をリフレッシュした瞬間だった。

陸の視界になにかが蠢いた。

それはヴォルトの変身能力を得た副作用として手に入れた視能で  
も捉えきるのでやつとだ。

揺らめくような残像を残しながら動くそれは人と人との合間を縫

いながら通り過ぎていった。

ほんの一瞬まはたきの出来事に、僅かでも戸惑ってしまった一瞬を突かれる。

「きや——！」

「しまったー！」

空気を張り割くような悲鳴と共に一体のヴォルトが小柄な少女を追いかけていた。

咄嗟に名前を叫ぶ。

「康介！」

「どうすれば良い!？」

「あの子を保護次第離れろ！ おれが抑える！」

「わかった！」

康介の了承を待たずして、陸は屈み込んだ足に力を込める。

前に蹴り出そうとする意思を力で抑えストップパーをかける。

ギリギリと骨が軋み、動悸がひたすらに前へ前へと進みたがる。

この間僅か一秒。

康介が目の前を通り過ぎると同時に身体中のストップパーを外すと、副作用の筋力強化で倍増された脚力が陸を弾丸のように押し飛ばす。

スタートダッシュの際に踏みしめられていた地面は陥没し、薄っすら生えていた雑草が根元から引きちぎれ茶色い土が丸見えになった。

怪物の如き全身駆動でヴォルトへの距離、百メートルを約三秒で走破。その勢いのまま身体ごと身を投げ、ショルダータックルの要領でヴォルトを押し倒した。

康介達の方へ転がった陸は不明瞭なノイズの塊になりながら立ち上がる。無論、周囲には五つの結晶が舞っている。

「変身」

顔を隠すように左腕を上げると、時計回りに結晶が嵌め込まれた。鮮明になった姿はこの前の素体と似ている。

しかし若干差異はあった。

鋭い目が瞳孔のように丸くなり、目の周りに頭蓋骨の窪みのような黒い斑点模様がある。しかも結晶が嵌った部位以外にひとほひとほ一歯一歯が不

揃いな鋭い骨が生えていたのである。

この変化は彼がトランスドライバを介さないで変身した証。

この姿こそが陸の変身する本来のヴォルトということだ。

——呼称名、スケルトン。

まるでなにかのガワがついていたかのような外骨格。凶暴な見た目とは裏腹に、陸のバトルスタイルが反映されていることで、腕や足の鋭い骨は少し退化している。

そう、ヴォルトには所謂学習機能さまというものが備わっている。もつと言えば生物が進化する様さまとでも言ったところか。

変身者の性格、戦い方、運動機能。それらを常時モニタリングすることで、戦えば戦うほど自分に合う姿に近づいていくというわけだ。

陸の場合は全身の武器を活用する戦い方から拳で殴り飛ばす戦い方に。先日戦ったオブザーバならただの杖が鎌になったりと、多種多様に変化する。

そして今のスケルトンは既に陸の使い方に馴染んだ、理想の姿だと言える。

野性的な、腰をやや低めに落とした構えで敵を見据える。

「来いー！」

「うう……うう」

対して向かい合うのは前にも何度か見た姿。フェアリーと呼ばれるヴォルト。紳士のような出で立ちをした姿だったが、変身者に合わせているのか、頭に被っていたシルクハットが消えている。

「あつー！」

声にならない声を発しフェアリーが猛る。

右前腕に取り付けられた結晶の上に小型のリボルバーカノンが召喚され、その砲口が陸へ向く。

二度三度マズルフラッシュが起ると、ゴポツという音と共に陸の足元の地面が抉れた。

だがそれよりも速く、陸は地面を蹴飛ばしている。

「うおおらあつー！」

前方へ跳躍、すれ違いざまにこちらへ照準を向けるリボルバーカノ



ンの砲身を蹴り潰す。ひしゃげた砲身が小さい爆炎を上げ、フェアリーがよろめいた。

そして二撃目と左足を下げ、左へと振り向く際の速度を乗せた右のボディブローを相手の腹部へ放つ。

その拳は腹部に潜り込みダメージを与えるばかりではなく、陸がさらに二、三步踏み出しかち上げることで、腕一本で軽々とフェアリーを放り投げた。

これはフェアリーの身体が元々軽くなるように設計されているのもあるが、その軽量性は飛行する際の障害にならない程度の調整しかされておらず、腕のみで浮かせるというのは、それほど陸の臂力が桁外れだと言うことだ。

先程の一撃を見舞ってから未だふらつくフェアリーに、陸は右足を引き右腕を引き絞る構えで応えた。

「呆気ないな。んじゃ、必殺技でフィニッシュだ」

と、決め台詞を言い相対する敵へ全速力で接近するも、今はあくまでヴォルト。仮面ライダーの力は使えない身であるから、叩き込むのはごく普通のパンチとなってしまう。

しかし、もしも万全な状態で叩き込めたなら、無理な態勢ではなく、妨害もなく、しつかりとした力の伝達を行えたとするなら、それは一撃必殺と呼んで遜色ない威力へと昇華する。

スケルトンは陸からの性質変化で攻撃特化仕様。防御の薄い相手ならワンツーコンボを決めただけでも瀕死に追い込める性能を持ち、悪質なことに骨格の呼び名を持ちながらも、変身者の筋力強化で威力の上乗せが出来てしまう特攻ヴォルトなのである。当れば致命傷必至の一撃を放てることからチーム間では短期決戦型と、誰もが諍いを避けたがる。

そんな彼の必殺技。なまじ防御の薄い、飛行前提の性質のフェアリーが受ければ変身者の身に振りかかる衝撃は桁外れなものだろう。それを陸自身も無自覚に認知していたからだろう。その必殺技を止めざるを得なかったのは、今まで康介に保護されていた少女の叫び声のせいだった。

「ママー！」

——ピタッ。

幼い児童特有の甲高い声が空気を伝わり、陸の耳に届いた時、既に振り抜けば拳が当たる距離まで近づいていた彼の動きが止まった。

「ママ……ってことは、あの子の母親?!」

驚愕のあまり一度目を逸らしてしまったことが仇となる。

一瞬間の間、目の前に突き出されたのはもう片方の腕に召喚されたりボルバーカノンの砲口。手の先から握り拳二つ分飛び出た鉛色の砲身の根元には、発射機構や回転式弾倉、薬室が詰まった円筒が、埋め込まれた結晶の上に存在していた。

「しまっ……い！」

防御に徹する暇はなかった。

ただ、強化された感覚が、今から自分を撃ち抜く弾丸の挙動を、見えない場所まで余すことなく捉えてしまう。

ヴォルトの光を反射しない真っ白な甲殻とは違い、鈍色に陽光を反射する回転式弾倉が、小さな火花を上げながら一つ分回転し、薬室から収まりきれない爆発の風圧で弾丸が射出。砲身を伝わり、内部のライフリングで回転され、砲口から飛び出た。

リボルバーカノンの口径は小銃のように小さくはない。今でも目に見て分かるほどの大きな穴だ。人間の肉体を容易にちぎり飛ばすくらいなら造作も無いだろう。

そんな威力を持った弾丸はもう、頭の目の前へ——。

ズゴンッ！

陸の身体は軽々と空中へと、甲殻の欠片を散らしながら真後ろへ吹き飛んだ。

## 第四話 「動かぬケツイ」 part 1

1

——ズゴンッ！

公園に突如現れた二体のヴォルトを双眼鏡で見つめる青年の耳に重い音が伝わってきた。

レンズの向こうではスケルトンが横に倒れ、頭からの硝煙を吐き出しているのが見える。

「あいつは確かあ……アシッドスターのメンバー……とうづきりくとか言ってたな」

彼がその光景を見たのはほんの偶然のことである。日課のように街を徘徊する最中、偶然双眼鏡が放置されているのを発見し、なんの気もなしに覗いたら見えてしまったのだ。

「フィールド外でゲームって訳じゃないよなあ。チームメンバーなら知ってて当たり前だし……」

ヴォルトが本来のルール外で使用されている事を疑問に思いながらも、青年の目は新しい玩具を見つけたように爛々とぎらついていた。

「でも、面白そうなことしてるよなあ、ウヒヒ！」

にまりと口角を上げ、気味悪く笑う。

そしてスケルトンの後ろにいる少年と幼い女の子に、値踏みするような視線を向け、

「すん——げえ弄りがいがあるよお！ ははあつ、楽しめそうだなあ……！」

双眼鏡を両手で押しつぶした。

外形を保っていたプラスチックがひしゃげ、レンズがバラバラに砕け落ちる。

と、突然誰かが青年の足を掴んだ。

ボロボロになった袖に血が滴る拳。それを見た彼は先程までの自分の行動を思い出す。

思い出し、伸びた腕の持ち主である男に視線を向けた。

「ああ、まだ生きてるんだ、お前。丁度いいや」

血だらけで平伏する男に冷めた眼差しを送り、うっとおしそうに腕を蹴り飛ばすと、地面に散らばっていた長めのレンズの欠片を拾い上げた。

青年は口だけで嬉しそうに笑う。

それだけで、男はこれから何をされるのかがおおよそ分かってしまったようだ。くぐもった呻き声で目の前の青年に必死に助けを請う。

しかし彼はそれを分かっているながら、一層口角を吊り上げて、うるさい男の喉に欠片を抉りこませた。

「人を痛めつけながら殺すのは初めてなんだよなあ。だから俺の練習に付き合ってくれよ、おじさーん」

あまりの激痛で開けっ放しになっていた口に、潰れた双眼鏡を押し込む。

それだけで男は苦しそうに瞳孔を開き、涙を滲ませる。

だが、青年にそんな表情を見せたとしてもそれは無効果だ。彼はただの好奇心で動いている上、非常に真面目なのだ。

「いいねーその表情。痛めつけられるとそんな顔すんのかあ」

ひしやげた双眼鏡を靴底でさらに奥へと押す。

それを男の口の端から血反吐が飛び出ても止める事はなかった。

やがて男の目から生気が消えると、ようやく青年は足をどけた。

「ヒヒ、ウヒヒヒヒ。はあ………世の中には楽しいことがイツパイだよなあ。この街は特に、『えんたーていんめんと』だよ!! ハハ、お前はどうかだろうなあ、りくう! ギャハハハハハ!」

腹を抱えて青年は哄笑した。

足元に転がる男の死体は片腕が失く、もう片方の腕は手首から先が消えている。はつきり言っただけで惨殺死体だ。

ひとしきり笑い転げて疲れ果てたのか、青年はゆっくりとその死体に座り込む。

彼の手には注射器型のシリンダー——スパークが握られている。陸

やチーム所属の人間が持っている銀色のものと、ガンメタの黒で塗られたもの。

もちろん二つとも仕様が違う。

銀色のモデルは誰しもが手にしているタイプ。「トランス」という能力を宿すための道具だ。但し、シリンドラの先端には安全装置の力が付いている。これのおかげで大電流の殆どが抑えられる。

だが、もう一方のタイプは用途さえまるで不明の代物だ。それはこの青年も例外ではない。

その二つを交互に上げ、青年は迷っている。

「遊びの手始めはこいつ……。どっちにしよおかなあ」

長考の末、黒いスパークだけを手元に残した。

「さて、どう進化してくれるかなあ」

まるで実験でもするかのような楽しそうな期待を込め、近くに転がる死体にスパークを叩き当てた。

2

一方陸は、何事もなかったかのように右頬を押さえながら起き上がっていた。

「イテエ……、案外、通らないもんだな」

そうぼやく陸の頬には弾丸がめり込んでいた。

貫徹力がなかったのか、それともヴォルトの肉体の強固さが勝ったのか、放射状にひびが広がってはいるが、中身には至っていない。

しかし、この衝撃で身体を覆う外壁が脆くなったのは事実だ。

おそらく1発でも受ければ重症どころではないだろう。

頬に刺さった弾丸を抜き取ると、再び接近する構えをとる。

すると、陸が起き上がったことに反応したフェアリーが、再び砲口を向ける——かと思われたが、何故か背中を見せ逃げていく。

だが、陸は焦ることも驚くこともなく、腰を低く落とし、瞬間前方へ蹴り出して全身を駆動させる。

前を走るフェアリーは持ち前の身軽さから、陸のスケルトン以上の

速さを叩き出している。

少しの足止めとしてトランスドライバを乱射してみるも、狙っているとは到底思えない軌道を描いてしまい、当たる気配はない。

「クソツ、やっぱ武器は苦手なんだよ」

舌打ちひとつ。次の策を練るために周りに視線を巡らせる。

間もなく到達するのは建設途中の空地ぐらいなもので、奥に行くに連れて人気の少なそうな場所に近づいている。

(あそこまで追い込めば……いけるか?)

と、算段を立てたはいいものの、唯一追い込むために使える武器があの程度の腕前だ。到底期待はできない。

相手は未知の敵だ。今までの言動(と思しきもの)から察するに、コミュニケーションが取れる状態でないのは明白だ。

ただの直感や本能で動いているなら辛うじて誘導は出来そうだが、顔の割れた変身者のことを考えれば、可能性としてはありえない。万が一と言いうこともあるかもしれないが、そんな方が一は〇に等しい。となれば、だ。

彼女はどのような思考ルーチンで動いているのか。

それが謎だ。

なにせ出会ったことのない特例であり、射程距離に入れば問題はないが、そこまでに行く対処法がない。

「あーくそっ！ 考えんのメンドクセー！」

もう半ばヤケクソの気持ちで狙いを済まし、引き金を引く。

鮮やかな水色の光弾がまたも見当違いの方向へと飛んでいくが、突然フェアリーが道路沿いの建設現場へと飛び込んでいった。

思わぬ偶然だが、喜んでる暇はない。

素早く頭の中の情報を整理し直し、先の標的に続いて自分も建設現場に突入した。

今日は空色から夕方の時刻だと分かる。作業員は全員定時で出払い、中には誰もいない。

公衆の目に止まる事がない。それは仕事をするにあたって理想の環境だ。

しかし、ビニールに包まれた骨組みの中に、フェアリーの姿が見当たらなかった。

それも忽然と、気流さえも起こさずに消えていた。

「どういうことだ？ なんの痕跡もない……。ほんの三秒前だぞ？」  
僅かに意識を集中しても鉄骨の錆びた匂いがするだけで、それ以上はわからない。

まるでフェアリーがいたことだけがすっぱり抜け落ちた感じだった。

しかし、陸はその異変を感じた瞬間、周りへの警戒を解いていた。

「……いや、つまりそういうことか」

ふと、陸は自分に生えている骨の一部を取り、目の前へ投げ落とすと、地面に着地する前にその骨が砕かれた。

「やつぱりな。そこら中に罠を張り巡らしてやがる」

そう言う彼の視界には、縦横無尽にこの空間を制する糸の大群が見えていた。

ワイヤートラップの類だろう。その糸は細すぎる上に薄暗いのも相まって、パツと見ただけではわからない。

これはヴォルトの原型アーキタイプからくる能力なのだろう。ヴォルトは基本、世界辞書ライブラリに登録されている概念を基底にして設計されている。進化とは違い、元からついた固有能力と行った具合だ。

つまりこれはフェアリーの持つ固有能力。

——罠を張り、それに標的がかかるのをコソコソ見ている。世間一般でいう『悪戯』だ。

姿を見えなかったのも、見えないように見せかける『悪戯』であると考えれば妥当に思えた。

となると、今この空間はあのおかしくなったフェアリーの遊び場ということだ。

だが固有能力の活用というのは、普通の一般人ならまずすることはないし、それを実行しようと思立つことはないだろう。

なぜなら、その方法を知らされていないのだ。

出来ないことをやるというのは誰にとっても難しいことだ。それ

をここまで巧みに扱うとなれば、現状は最悪である。

「はあ……時間外業務は嫌いなんだ。どうか諦めてくれませんかねえ!?」

……………。

「——つて言っても反応はないよな」

なんの反応もない内に陸は行動を始めた。

先手必勝とばかりにトランスドライバを取り出し、スパークを差し込む……が、

『——』

「あれ?…なんで?」

なぜかあの時と同じようにドライバが動かなかった。

あの時鳴っていたはずの音声は流れず、一向に変身シークエンスが開始される気配もない。

陸は焦った。

なにせあのトラップ、もし引つかかってしまえば、先程のリボルバーカノンの砲撃が叩き込まれることが通過した音でわかった。

あの細糸へ、身体の一部をもう一度正確に当てる技術が陸にはない。

しかもそんなことで時間を浪費してしまつては、チャンスと感じたフェアリーからの狙撃を受けてしまう。

あれは一部への局所的な攻撃に見えて、実はその衝撃が波のように全身に伝わっている。既に全身、見えないひびで覆われているようなものだ。こんな状態で強行突破、もしくは立ち往生でもして砲撃を喰らえば命がないことぐらい容易にわかる。

どう転がっても悪手にしかならない状況に落胆し、諦めかけた時、ようやく右足の違和感に気づいた。

「うお!?…なんだこれ?」

努めて気だけは逸らさないようにしていたが、驚きがそれを取り払ってしまった。

右大腿部に取り付けられていたアーマーに、横に厚みを増した凹型の窪み。



気づけばドライバをその窪みに嵌めていた。

『System start up』

「そういうことかー!」

ようやくドライバが起動し始めた。

それと同時に陸から網目状の稲妻が放射状に広がり、周囲の糸を寸断する。

『Stand ready?』

承認にも近い問。

陸はいつもの言葉で答えた。

「――制圧する」

『Type Unbreaker』

陸の周りに残りのアーマーが召喚され、まばらに生えた骨が抜け落ち、顔の模様も再び鋭い顔つきに、そして体色が黒に変化した。

「変身!」

装着、展開。

右半身のアーマーから、右前腕と脛を包む装甲が飛び出して張り付く。

直後、陸が無造作に薙いだ右腕が、飛んできた弾丸を装甲で弾いた。

あの高威力があまりにも容易く無効化されていた。

「おお……」

思わず感嘆符が出てきた。

依然としてこの機械の動作というものが釈然としないが、ただひとつだけ理解したことがある。

――どうやらこいつも進化するようだ。

続いて展開した胸と背部のパーツから前後に分割された仮面が現れ、陸の頭をあたかもたい焼きでも作るかのように板挟みにした。

後は展開したアーマーが閉じる動作が入るだけだが、陸はそれを待たずに右手を振りかぶり、左足を下げて、その場で素早く回転した。

背後に打ち込んだパンチ。その先にはフェアリーがいた。

「――っ!」

「驚いただろ。おれは感覚が余計に鋭くてね、いつも耳が痛いよ」

腕アーマーが閉じる衝撃でさらに押し出される拳がフェアリーを吹き飛ばす。

直後、胸アーマーも合体。

周囲に火花を散らした。

変身シークエンスが完了し、今日再び仮面ライダーへと変身した。

真っ黒いボディースーツの上に装着されたパールホワイトのアーマーと仮面は、ビニールカーテンの隙間から差す夕日を吸収してオレンジ色に輝く。

その輝きは心なしか、周りを仄かに照らしているような気さえ起さず。

「さて、今度は逃さないからな？」

陸は腰を落として左手を握りしめる。

ふらふらと立ち上がったフェアリーをつり目気味の複眼で捉えると、右手でホルスターに収まったドライバを素早く操作する。

カバーを上げて下ろす動作。

これによつて陸が考えていることは瞬時に分かる。

早々に必殺技を使い、この戦いを終わらせる短期決戦だ。とは言つても、かなり長いやり取りを行っているのではや短期とは言えない。

彼を突き動かすのは時間外業務を嫌う先程の発言のみ。半ばヤケクソでドライバの音声に自身の咆哮を重ねる。

『インパクト——』

『スマッシュ——』

『——キロ ヴォルト』

ドライバとの掛け合いを経て、握り込んだ左拳が帯電し始める。

そして間髪入れず拳を地面へ振り落とした。

衝撃<sup>インパクト</sup>。叩きつけられた地面は案の定無数のひびが入り、隙間の奥から橙色にも似た光が溢れだす。

溢れだした光は一本の線へ集束し陸の手元へ。

それを器用に手繰り、フェアリーへと巻きつけてその場に縫い止める。

逃げられる事なく仕留めるために陸が即興で作った対応策だ。

「うつ、ぐ、がああ！」

もがくフェアリーを縛る手を緩めずに、光の綱を右腕に固定。デスマッチ状態から腕を振り上げてフェアリーを高々と釣り上げた。

直後、フェアリーを戒めていた光は陸の右腕に素早く戻ると、仮面ライダーに備えられた身体中を這う供給ラインを通って左手に力が集中する。

「フィニッシュだ!!」

その言葉と共に下半身を踏ん張り、全身を旋回させて、飛び込んでくるフェアリーへ「うおおらあっ!!」と全力の拳を見舞った。

「……はあっ」

地面に倒れ伏したフェアリーはノイズに包まれて一人の女性へと戻った。

遠目で見ても若妻と言ってもいい瑞々しさだった。

すぐにでもあの少女のために助けに行きたいところだったが、こちらもちちらで計算外の長期戦を持ち込まれた反動が来ていた。

酸欠気味に肩を上下させる陸は、変身を解除する気力もからっぽのまま虚空を睨んだ。

「結局、この有り様を起こした犯人はどいつなんだ？」

思い巡らせるのは、裏で操るものの存在。

スパークを売る売人なら何度も突き止めてきたからこそ、そのやり方から考えて今回は異端であった。

変身者の制御を逸脱し、主権を奪って活動するヴォルト。こんなもの異端でなくて何と言うのだ。

——ただの道具が意識を持つ？

ご冗談。あれはあくまで過大な電気信号を流した結果、人の深層に埋もれた力が目覚めたただけだ。

——毒クズリと一緒にナノマシンでも詰め込めば？

可能性としてはあるが、この結果はもはや実験としか言い表しようもない。

それに今まで止めてきた人達は全員安定した力を出していたし、陸

が戦ってきた一年と半年、その間にこの実験を組み込む時期はいつでもあつたはず。

——進化の一つというのは？

それでこそ無機物に意思が宿ると同じことだ。防衛機能が備わつたとしても、あんな能動的な動きはできない。

「だったら……」

こいつを仕出かした奴はどこのだいつだ？ と。

気づけば両手を強く握り込んでいた陸。

相当怒気を張らせていたのか、手の中にはコンクリートの破片があつた。

「ふう……こんなところで考えても意味ないか」

そう自分を言い聞かせ、起き上がろうとした矢先、重力に引つ張られるような疲労を感じた。

途端に受け身を取る。

自覚すると、身体が動かなかつた。

「そうだ。副作用を考えてなかつたな、初めて。しかも、こんなところで……！」

後半、苦々しい口調で終わらせたのには訳がある。

陸は早る気持ちを抑えてもう一度耳を傾けた。

そうだ、何も間違っていない。

確かに聞こえた。

鉄骨のネジが緩む音。キィキィと擦れるような音だ。

まあ、その音がどんな音をしてようと、とどの詰まりはいずれ起こる崩落を意味していた。

恐らく先程の一撃で骨組みの結束が脆くなったのだろう。

どんどんとその時は近づいている。

「くっそ、ふざけんな。ふざけんなよー！」

簡素に悪態をついてもこの事実が変わらない。

地に縫い止められていようと構わずに、芋虫のように這い始めた。

五センチにも満たない距離すら進めない自身の身体を陸は恨む。

「ぐっ……！ くそっ、まだだ……！」

音の周期が段々遅くなってくる。それに反して陸の動悸は速くなるばかりだ。

焦り、動揺し、慌てる。しかもその身体は鉛のようで。

もはや救出は絶望的だった。

「はあつ、はあつ、はあつ！」

そして陸の動悸が限界の速さまで刻まれたとき。

陸は即座に上を見上げた。

そこには――……………。

3

その頃、康介は走り去っていった二体を追いかけて建設現場の手前まで来ていた。

「……………ここか？ はあつ、あいつが入ったの」

康介は息を整え、高校生とヴォルトの運動能力に凄まじい差があるのを身に沁みて感じる。

このニキ口を息も絶え絶えで走った自分を励ましながら足を踏み入れた。

すると、目の前の骨組みが盛大な音を立てて崩れ落ちた。

「まじか!?! あいつ大丈夫かよ!?!」

慌てて駆けつけるが、崩壊した鉄屑の山にはビニールが覆い被さり、探そうにもまずはそのビニールを剥がさなければならなかった。

しかしこれが相当厄介で、端がどこかに引っ掛かっているのか全く動かない。

「おい！……………つ、到月！」

居てもたつてもいられずに叫ぶと。

ガゴンツ！ と鈍い音と共に鉄骨を、ビニールすら弾き上げて陸が姿を現した。

舞い上げられた鉄骨が山に刺さっていく。

その光景はアニメのワンシーンのように荘厳で、康介は一瞬だけ見惚れてしまった。

だがすぐに正気に戻り、陸へと詰め寄った。

「ヴォルトはどうなったんだよ」

陸は冷たい目で康介を一瞥すると、すぐに目を逸らす。

その一動作から康介はおおよそを察することができてしまった。

震える声で陸に尋ねるが、

「おい、まさか……………そこに、居るのか?」

「……………」

うんともすんとも言わず、無言で答える陸。

しかし、それが殆どを物語っていた。

「ふぎけん……………。なんでだよ!」

「……………仕方なかった」

その言葉に康介は陸の胸倉を掴み上げた。

怒りをはらんだ瞳が容赦なく貫く。

「……………」

それでも無言を貫き通す。

そんな彼に、ついに康介は辟易した。

「仕方なかったで、子供の親殺したのかよ!! —— 答えろよ!!!」

この怒りのまま怒鳴り散らすのは間違っていると分かっているとしても、もう身体が、心が止まらなかった。

そして遂には、

「お前は——ヒーローなんかじゃなかった!! 彼奴等と同じだよ!

人を守ってるフリして。戦うことしか頭がないあそこに立つ奴等と

一緒だツ! 怪人なんだよお前も!!」

胸の内を曝け出すような罵詈雑言を吐きかけた上、不貞腐れるようにその場を後にしてしまっていた。

ただ一人、取り残された陸は、歯を割れんばかりに噛み締め、流れそうになる涙を堪えた。

「そんなもん……………わかってんだよ!!」

彼女がいたであろう場所。そこに刺さった鉄骨が消え入りそうになる一欠片の夕日を眩く反射した。

## 第五話 「動かぬケツイ」 part 2

4

「何なんだよ、あの人……」

翌日、チームのテナントに帰っていた康介はそんな事をずっと呟いていた。

帰ってくるなり会議室の椅子で眠りこけた彼は起きがけに先日のことを思い出したのか、恨みがましく親指を噛む。

「仕方ないで……そんなこと、できんのかよ……」

思い出すのはあの時のやり取り。

——……………仕方なかった。

陸が、あの時発したのはそれだけだった。

何が仕方なかったのか、どう仕方がないのか、それを問おうにも陸からはなにも聞き出せないだろう。

「はあ……」

終いに不貞腐れた康介は溜息を吐き、スマホを取り出した。

電源を点けたディスプレイに浮かび上がるのは二人の男の子が写った写真。どちらも嬉しそうに笑い、肩を組み合った、過去の思い出の写真。

「——俺は、絶対に、」

「絶対に……なんですか？」

「うおわあっ!?!」

突然背後から声をかけられた事に驚き、咄嗟にスマホを隠した。振り向いた先にいたのはいつも受付に座っているはずのラツキイだった。

「なんで、あなたがここに!?!」

「なんでってそれは瀬良さんがここにいるからですよ？ 昨日はここでお泊りになったようで、おはようございます」

「あっ、おはよう、ございます。ずっとここに居るわけじゃないんですか?」

「はい、そうですね。ですが、到月さんはこの空き室を使って寝泊ま

りしています」

「どうやら出勤時間と言うことらしい。

ラツキイは基本朝から部屋の掃除、その後は休憩を挟みつつ受付をしているという。

こうして日常的な話を聞くと、人が死んだという事実を康介は忘れてしまいそうになる。

例えば自分が死んでしまっても、変わらず世の中が回り続けるような、世界に見放されたような感覚が。

それを紛らわすために康介はラツキイに話題を切り出していた。

「——到月さんがその子のお母さんを見殺しにした、と」

「はい」

神妙な面持ちで頷く康介。

しかしラツキイは真剣な彼とは対比的にただ微笑んだ。

予想外の反応に暫くキョトンと目を開いた康介だが、ラツキイは艶然とした笑みを崩さない。

「瀬良さんが他人に隠したいことがあるように、到月さんも到月さんで案外隠していることがあるんですよ。例えば彼は、助けられなかったことはこれが初めてではないんです」

「だからあんなに素っ気ないってことですか？ 慣れすぎているから」

「それは違います。今も悔やみ続けていますよ？ なんなら先日のもその対象のようで。度々相談も受けます」

と、ラツキイは陸について教えてくれるが、康介はまだ納得できなかった。

「だったらなんで、なんで陸は平気な顔が出来るんですか？」

それは素朴な疑問だった。

理由から導いた達観ではなく、純粹に思い当たった疑問。

なぜそれほど重荷を背負って尚、自責の念に潰れずに平然と冷めた対応をしているのか。

それに関してもラツキイはすぐに答えてくれた。

「案外簡単で、誰もがやっていることですよ」



ラツキイはそれだけ言うと言を切り、ニコニコとしたままカウンターへと向かっていく。

「……え？ それだけ？」

酷く簡潔な答えに康介は不意を付かれ、彼女の背中が消えてからその答えの不確かさに気づいた。

結局その後再び問い詰めたが、本当の意味を康介が知り得ることはなかった。

5

天上に向けてそびえ立つ鉄骨の縁が再び光を放ち始める。空は藍染めのような空色から段々と鮮やかな空色へと移り変わっていく中、一点だけ蠟燭のようにぼんやりとした陽光が、そこに立つ陸の顔を焦がしていた。

そこは廃墟。

前日まで建設現場の要となっていた資材が散乱する鉄屑の山だ。既に使い物にならなくなった鉄骨が異様な捻れ方でそこらに捨て置かれている。

その一部、地面に向かって垂直に立てられた鉄骨の傍に陸は佇んでいた。

彼は<sup>まぶた</sup>瞼にかかる黒髪をどかし足元に転がっていたものを拾い上げる。

それは乾いた血がこびり付いたスパークだった。

「ああ、……おれは」

スパークを握りしめながら鉄骨を見上げる。

これ自体は切り口が『エ』の字になった典型的な鉄骨なのだが、根元から広がる真っ赤な染みがここで起きた事の凄絶さを物語っているようだった。

そんな光景にこれまでの既視感<sup>デジャヴ</sup>を覚え、気づけば陸は衝動的に鉄骨を殴りつけていた。

「また、……まただ。どうしようもできないのか……！」

憎たらしげに吐き捨てる。

この一年半の間、ヴォルトとして活動した陸の功績は歴代には見ない程に優秀なものだった。鎮静化させたヴォルトは軽く二百体を超え、救ってきた命や日常はそれ以上ある。戦いの中で開花させていったセンスに鋭利過ぎる五感と経験からなる知識を複合させ、どんな相手だつて倒してきた。

これだけの成果を見れば、誰もが陸を救世主かなにかと思うだろう。現に表向きだけならそうだ。ヴォルトが傷害事件を起こすこの街において、人間の味方をする唯一のヴォルト。それが絡鳴市の住人にどれだけの期待と希望を抱かれていることか。

その一例が康介である。いつかは過度な期待を裏切られ、どこに向けようもない怒りをぶつける。

陸はそんな人間をどこまでも見てきた。人の欲望に直に触れるからこそ、ただの欲望とは別の何かを。しかしそれを悪いことだと陸が思ったことはない。それどころか正しいとも思っていない。

そんな気持ちを抱きながらも陸は無償に他人へ手を差し伸べる。なぜか？ と問われても、既にその答えを陸は失ってしまっている。

いくつもの悲劇に立ち会う中で理想は汚濁していき、目標を取り落とした。

その意味で言えば康介の言うとおり、陸はヒーローではないのだ。「——とにかく、主犯を探すしかない」

そう判断し足早にこの場を去ろうとすると、丁度建設現場に入ってきたピークと鉢合わせた。

ピークは意外そうに目を見開いたが、すぐに不敵な笑みを浮かべる。

「よっ！ まーだここに居たのか」

「ナイスタイミング、丁度お前のところに行こうとしてたんだ。……でも、なんでここに？」

「そりや後始末のために決まってるんだろ。派手に散らかしやがって」  
そう言つて縦に刺さっていた鉄骨を無造作に倒す。

「おい。それは、」  
「ん？ 倒しちやまずかつたか？」  
「いや、なんもない。それよりも話したいことがある。……ヴォルトが変身者の制御を離れて暴走することなんてあるのか？」

6

二人が各々の決断を下す中、ここでもまた彼らと近しい存在が決断を迫られようとしていた。

寄る辺よるべをなくした女の子が、一人うずくまっている。親からの遺産か若干茶けた黒髪を背中に流し、おめかしした水玉のワンピースでひっきりなしに目元を拭っている。

その姿は小さ過ぎて誰の視界にも映らない。

「ママ……どこに行っちゃったの？」

か細く、か弱すぎる声は誰にも届くことはない。

彼女の目の前に現れた青年以外には。

「どうしたの？ おじよーちゃん？」

女の子と同じ目線になった青年は人懐っこく笑いながらも、その目は大きく開かれている。

幼い子供には分からない些細な狂気が彼女を射抜く。

「おれがおじよーちゃんの話聞いてあげるよ？」

「でも、知らない人には気をつけてってお母さんが、」

「だーいじよぶさ。おれは君のおかーさんがどこに行つたか知ってる。ほら、知らない人じゃないだろ？」

そう言うとき女の子もぱあつ、と明るい顔になる。

「お母さんどこにいるの!？」

「おかーさんはね……死んじやつたんだよ」

「え……?」

「死んだんだ、君のおかーさん」

唾然する女の子とは逆に青年の笑みは段々と深くなっていく。

それとは対比的にやがて死ぬという単語を理解したのか、そのあと

けない顔が蒼白となって震えている。

「うそ」

女の子は恐る恐る青年を見上げた。

目があった顔に張り付くのは柔らかい笑顔と、絶対に笑わない双眸。

「嘘じゃない」

弓なりの口から響く重々しいトーンが幼い心を叩きのめそうとする。

それでも彼女は認めたくないものを嫌々と否定した。

「うそだ」

「嘘じゃない」

「うそだ！」

「嘘じゃない」

「うそだ!!」

「うそだよ!!」

否定するものと突きつけるものの応酬。

女の子が一番強く言い放った最後の言葉だけ青年は言い返さなかった。

「——じゃあうそにしてみる?」

彼女の眼前に差し出した黒いスパーク。

底知れぬ禍々しさが触れるものを拒絶しようと渦巻く。震えて立つ女の子を暗黒に飲み込もうと渦巻く。

「きみが望むならおれはこの力をあげよう。きみの言ううそが嘘であると証明できる力はもう手の中だ。どうする?」

「わたしは……」

……

「あーあ、取っちゃたね。選んだからには働いてもらおうか」

——青年の周りに渦高く積まれた人の山。それは死体か、あるいは……

「おれの臨む結果のために」

「どうしてそんな事を」

ピークはゆっくりと首を傾げる。

「今回のヴォルトは異常だ。今まで起こらなかったことを網羅するみたいに披露してきた。一般人は固有能力を知らないだろ？」

「ほう、そりゃあ興味深い」

「お前がどう思うかなんかどうでもいい。あるのかないのか聞いてんだよ」

「さっき言っただろ。まずそれを知ったところでお前は どうするつもりだ」

正論をぶつけられ言葉が詰まる。

「それは……」

知ったところで自分は何をしようとしていたのか、胡乱になった思考では思い出せない。

知っていようと知ってしまいと行きつく終着点は一緒のはずだ。暴走しようとする自分が制圧すれば同じ事なのに。

「意味のない詮索はやめておいたほうがいい。俺たちが見つけるべきなのは大元だ。それで全てが終わる。暴走や異常が起きるのもわかるが、最優先すべきなのはそっちだ。お前はお前の仕事をしろ」

「……………分かったよ。おれがやるべきことはそれだけだからな」  
そういつて立ち去ろうと背を向けたところで呼び止められた。

改めて向き合った。ピークの顔は今までにないほどに真剣だった。

「なんだよ、もう話すことはないはずだ」

「一旦頭を空っぽにしてこい。今のお前じゃ誰も救えない」

は？ と陸は反射的に返していた。

「なんだよそれ。おれのやってる事が間違いだって言うのか」

「考え過ぎなんだよ、陸。俺達はヴォルトになった瞬間から人間であることを捨ててる。そいつらの行いが正義か悪かなんて考えてるんじゃないや覚悟が無いのと一緒だ。自覚しろよ、お前のやりたい事を」

いつの間に拾い集めた鉄棒を小脇に抱え、宥めるようにピークは言う。

確かにヴォルトは欲望で動くとは言うがそれが実践に直結した覚えがないのは密かに感じていた。

「おれはやりたいようにやってる。それで今まで充分だったし、そういう自分勝手が欲望じゃないのか」

「お前本気の脳筋か？ そうやってまともに向き合わなかったせいで行き着いた結果がこれだろうが」

ピークが顎で指し示すのは足元の惨状。

空想上の欲望で引き起こした、陸にとっては悪夢のような光景が錯覚として繰り返される。

苦い顔をする陸にピークは辟易したような嘆息をついた。

「陸、お前がヴォルトになった時に誓ったことはなんだ。人間をやめた到月陸はなにを欲望にしたか思い出せ！」

そうだ、陸は自分の中に引つかかる違和感に答えがなかった。なぜ自分が無性に手を伸ばしたくなる理由を失っていたのか。他人の行いを見定めなければと駆られる理由が。

それは正真正銘、欲望の欠如だった。

理由を失ったのではなく、前提をわかっていなかった。つまり欲望の定義自体を見誤っていたのだ。

「おれの欲望……なんだったんだ。おれ、」

「だから一度頭をすっきりさせろって言っただろ。そのままじゃヴォルトどころか、仮面ライダーもまともに扱えないまま悲劇を生み出し続けることになるぞ」

「……………」

「ほら行った行った。お前の仕事を全うしろ」

邪魔だと手を払うピークに、陸は大人しく従った。

今ここにいてもやれることはない。自分がやることはあくまで一つだと、それをピークに教えてもらったように思えたから。

「おれが人を守る理由、今度こそ守らなきゃいけないと思える理由……………」

突如響いた悲壮感に満ちた、戯けた喚声を背に。

いつもは年不相応な少年らしい笑みを浮かべる顔は、今だけヴォルトと対峙するときと同等の眉根を寄せた精悍な面だった。

8

絡鳴市はビルだけが立ち並ぶオフィス街としての側面を持っていてのは主に中央と呼ばれる場所のみで、そこから東西南北に分かれたエリアにはそれぞれが役割持っている。北は飲食店やデパート、様々な専門店や娯楽施設がある商業エリア。

陸たちの本拠地はここにある。

西は巨大な港や埠頭、工場に縁取られた工業エリア。南から東にかけては外界に繋がる橋があることから観光客用の施設が多い。

このように言ってしまうとザックリと分けられてるように思うが、実態は境界がだいたい曖昧で食い込んでいる箇所があったり、隙間を居住区域で埋めていたり、満遍なく広がった街になっている。

その中で西と中央の間は自然に溢れるエリア。康介はここに先日訪れたことがあった。もちろんあの女の子と関係する事だ。

彼女の名前は立島たてしま亜里沙ありさ。偶然にも巻き込まれてしまった被害者だ。

突然ヴォルトと関わる事になった彼女に妙な親近感を持つというのは失礼な事だけれど、なぜか康介は亜里沙を被害者と割り切る事ができなかつた。

再び同じベンチに座りながら昨日の公園を眺める。いつまで見てもやはりというか、昨日と同じ顔しか見せない。

たった一日の出来事を経て、康介は自分がどれだけ浅短な考えでここに来たかを思い知った。

そして、自分はここにいるべきではないと感じてしまっていた。だが逃げることはしない。康介にとってこれは決定事項なのだ。絡鳴市に来る前から決めていたけじめのようなものである。

それにしても。

今、康介が見ている光景はどこか既視感デジャヴを感じる。

「またこの前みたい……って、流石に考えすぎか」

否応なく考えてしまうのはやはり先日の景色。その一部始終を収めていなくとも凄烈を極めたであろう事を察せる廃墟。そしてその下に眠った一つの儂い命と正義を謳う怪人の冷たい眼差し。

物悲しい事件はいまも恐らく続いている。真実を解明する為に警察が動き出すはずだ。しかしその深い領域については警察の管轄でその内容を知る由はただの一般人である康介にはない。

一般人は日常の中を暢気に過ごすしかやることがないのだ。

「お前、やけに暗い顔をしているが、後ろめたい事でもあるのか？」

すぐ側から声を掛けられて、康介は一瞬遅れて首を左へ向けた。

隣にグレーのジャケツトを羽織った男が座っていた。開いたジャケツトの前からは赤と黒のチエツクシャツが見える。長い足を包む黒のパンツ、それとほぼ同色のショートストレートにした髪に強調された、端正な顔立ちは陸と比べるとクールな雰囲気。寡黙なのか口を真一文字に引き結んだ表情は、つい先程発言したのかを疑うほど眉一つ動いていない。

やがて銃弾のように真っ直ぐ濃いブラウンの瞳を向けられて、口元を緩く開け、返す言葉を探し倦ねているのを男は察したらしい。

右頬だけで薄く笑い、やおら視線を前に向けて口を開いた。

「ここで思い詰めた面をする奴は、大抵得体の知れない私情を持ち込んでいた。迷惑なやつらだ」

男の吐き捨てるような言い方に康介は若干嫌悪感を抱いた。

個々の持つ悩みや事情を思惟しゐすることに罪があるわけじゃない。少なくとも康介はそう思えた。

「……あの、それが俺になんの関係があるんですか？」

「お前のような奴はきつと真っ先に死ぬだろうな。死体を処理するだけにどれだけの人数が動くか知っているか？ 一人の死につき十数人が動く。誰も知り得ない独断を起こす度にその数の人間が巻き込まれる。つくづく迷惑だ」

最後の一言まで、憤怒も嘲りも、男の口調から全く感じられなかつ



た。大勢の言い分だとも言うように。

「……………」

その触れた者を凍傷にするような冷徹さに、再び康介は返すべき反論に言い淀んだ。

果たして男の持論が正しいかというのはわからなかった。他人の言葉を借りているような言い方に賛同できなかったのは事実だ。男の言い方がそう思わせたのであって、その内容はあくまでも個人の意見としか思えなかったから。

なのになぜ、自分はそれすら指摘できないのか。

その疑問に康介が呆然としたままだいると、男が弾かれたように立ち上がった。

何事かと身を強張らせた康介は、すぐさまその理由を理解した。

この公園に明らかな異物が混じっていた、視界の大半を埋める緑と焦げ茶のコントラストの中に、輝くように存在する白。

身体中に植物のようにも見えるボロ布きれを纏っている以外の特徴が見当たらない（というよりそのボロ布が身体を隠している）不気味なヴォルト。

気づけば視界にいたと言っても遜色ない突発な出現。ひっそりと魂を刈りに来る死神のようで。

その死神つぷりはその数メートル右にいた、走り込みをしている男性が、まるで幽霊をみたかのように転げ回る程だ。

頭と足の位置が置き換わるほどに転げた男性の不様さに、ようやくそこになにかが居ることを理解した民衆が遅れて騒ぎ出した。

思い思いばらばらな方へ散っていく人達に、男は小さく舌打ちを鳴らし、隣で未だ茫然とヴォルトを見ている康介の肩を引っ張って引き起こした。

「暢気に突っ立つてるのはお前の自由だ。だから良心で言ってやる。逃げるぞ」

「あ、ああ……………」

康介は胡乱げにただ頷くしかなく、よろよろとヴォルトに背を向けた。

刹那、背後から物恐ろしい殺気が漂う。

なにを引き金にしたのか、ヴォルトの標的がこちらに向いたのは明白だった。

「……オ、……オ、オ、………」

腹の底に響くように反響する、怨嗟の唸り声に背筋が凍りつきそうになり、動けなくなっていた足が自ずと動いていた。

未だになれない仮借なき存在感、敵意の目を向けられたときの過呼吸になりそうな重圧、足から這い上がり心臓を握りつぶさんとする恐怖、すべてが人の形に集約され、休む間もなく康介に襲いかかる。